八千代町埋蔵文化財調査報告書12

茨城県結城郡八千代町大字新井

小次郎内遺跡発掘調査報告書

—農業集落排水事業川西南部地区処理施設建設に伴う遺跡の発掘調査—

２００７

八　千　代　町
八千代町教育委員会
㈱地域文化財コンサルタント

八千代町埋蔵文化財調査報告書12

茨城県結城郡八千代町大字新井

小次郎内遺跡発掘調査報告書

—農業集落排水事業川西南部地区処理施設建設に伴う遺跡の発掘調査—

２００７

八　千　代　町
八千代町教育委員会
㈱地域文化財コンサルタント

序　　文

このたび、農業集落排水事業川西南部地区処理施設建設に伴い、八千代町新井に所在する小次郎内遺跡が発掘調査され、その成果を報告書として発行することになりました。今回の調査は、処理施設建設が遺跡の範囲内に計画されたことから、事前に発掘調査をして記録保存を図ったものです。

小次郎内遺跡は、鬼怒川の旧河道沿いに営まれた遺跡です。時代が奈良・平安時代の集落跡ということから、ちょうど古代の鬼怒川が河川改修された頃と時期が重なり、たいへん興味深いものがあります。

調査された範囲は、遺跡全体から見れば小さい部分ですが、竪穴住居跡が発見されるなどたいへん貴重な成果を得ることができました。この報告書が町民の皆さんはじめ、専門の研究者の方々にも活用され、少しでも八千代町の古代の歴史の解明にお役立てできれば幸いに存じます。

最後に、この調査にご理解・ご協力いただきました地元の皆さんはじめ、関係諸機関の方々に厚くお礼申し上げます。

平成１９年９月

八千代町教育委員会教育長　　高　橋　　昇

例　　言

1．本書は、茨城県結城郡八千代町大字新井字八反田66番地他に所在する小次郎内遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘作業から報告書作成に至る業務は、八千代町から委託を受けた株式会社地域文化財コンサルタントが、八千代町教育委員会の指導のもと実施した。なお、発掘調査に先立ち、八千代町教育委員会が試掘・確認調査を実施した。

3．調査期間は、下記の通りである。

・試掘調査　　平成17年 1月24日～平成17年 1月28日
・発掘作業　　平成18年10月25日～平成18年11月24日
・整理作業　　平成18年12月 1日～平成19年 2月15日
・報告書作成　　平成18年 7月 1日～平成19年 9月28日

4．発掘調査における調査担当者等は、下記のとおりである。

・調査担当者　　齋藤 洋（株式会社地域文化財コンサルタント）
・調　査　員　　遠藤雄一郎（株式会社地域文化財コンサルタント）
・調査作業員　　野村浩史　深山恒男　槇勝雄　川村理華　古澤 盈　中沢光男　川村勇一
　　川村晴江　古澤昭子　北島泉子　小野崎文男

5．本書の編集執筆等については、下記のとおりである。

・編　　集　　山野井哲夫（八千代町教育委員会）　齋藤 洋　小川将之
・執　　筆　　山野井哲夫　齋藤 洋　小川将之
・整理作業員　　野村浩史　増田香里

6．本調査にかかる記録類及び出土遺物は、八千代町教育委員会が保管している。

7．試掘・確認調査から発掘調査及び本書の刊行に至るまで、下記の方々のご協力・ご指導を賜った。記して感謝の意を表する。（敬称略・順不同）

鴨目 定　井上勝男　川村公男　飯ヶ谷正一　飯ヶ谷俊一
茨城県教育庁文化課　八千代町上下水道課　八千代町生涯学習課　有限会社矢中建設

凡　　例

1．第2図は国土地理院5万分の1地図「小山・水海道」を縮小して使用した。

2．第3図は八千代町発行「八千代町都市計画図1万分の1」を使用した。

3．第4図は茨城県教育委員会発行「茨城県遺跡地図 1/25,000」を縮小して使用した。

4．実測図の縮尺は各図面に記した。

5．遺物観察表中の法量は、［　］は残存値、（　）は推定値を示す。

目　次

本文目次

序　文……八千代町教育委員会教育長　　高橋 昇
例　言・凡　例
目　次
第１章　経　過
　第１節　調査の経過……1
　第２節　発掘作業の経過……1
　第３節　整理作業の経過……2
第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境……3
　第２節　歴史的環境……5
第３章　調査の概要
　第１節　試掘・確認調査の概要……8
　第２節　発掘調査の概要……9
　第３節　層序……10
第４章　遺構と遺物
　第１節　竪穴住居跡……15
　第２節　性格不明遺構……24
　第３節　土坑……24
　第４節　溝状遺構……32
　第５節　遺構外出土遺物……32
第５章　総　括……34
報告書抄録
写真図版

挿図目次

第 1 図　農業集落排水事業処理施設建設概要図‥1
第 2 図　遺跡位置図……4
第 3 図　遺跡周辺地形図……5
第 4 図　周辺遺跡分布図……6
第 5 図　試掘・確認調査区位置図……8
第 6 図　試掘・確認調査実測図……9
第 7 図　基本堆積土層図……10
第 8 図　調査区全測図……11
第 9 図　1 号住居跡……15
第 10 図　1 号住居跡出土遺物……16
第 11 図　2 号住居跡・出土遺物 (1) ……17
第 12 図　2 号住居跡出土遺物 (2) ……18
第 13 図　3 号住居跡……19
第 14 図　3 号住居跡出土遺物……20
第 15 図　4 号住居跡・出土遺物……21
第 16 図　5 号住居跡・出土遺物 (1) ……22
第 17 図　5 号住居跡出土遺物 (2) ……23
第 18 図　性格不明遺構出土遺物……23
第 19 図　性格不明遺構……24
第 20 図　6 ～ 8 ・10・14・15 号土坑出土遺物……29
第 21 図　20・24・27 号土坑出土遺物……30
第 22 図　性格不明遺構・1 ～ 34 号土坑・1 号溝……31
第 23 図　遺構外出土遺物……33
第 24 図　本遺跡と周辺遺跡より検出の住居跡……34

表目次

第１表　１号住居跡出土遺物観察表……16
第２表　２号住居跡出土遺物観察表……18
第３表　３号住居跡出土遺物観察表……20
第４表　４号住居跡出土遺物観察表……22
第５表　５号住居跡出土遺物観察表……23
第６表　性格不明遺構出土遺物観察表……24
第７表　６～８・10・14・15・20・24・27号土坑出土遺物観察表……30
第８表　遺構外出土遺物観察表……32

写真図版目次

写真図版　１　調査区全景１
調査区全景２
写真図版　２　１号住居跡全景
１号住居跡セクション
１号住居跡遺物出土状況
１号住居跡カマドセクション
１号住居跡調査状況
写真図版　３　２号住居跡全景
２号住居跡セクション
２号住居跡カマドセクション
２号住居跡カマド遺物
２号住居跡調査状
写真図版　４　３号住居跡全景
３号住居跡セクション
３号住居跡遺物出土状況
３号住居跡カマドセクション
３号住居跡カマド遺物出土状況
写真図版　５　４号住居跡全景
４号住居跡セクション
４号住居跡カマドセクション
４号住居跡カマド遺物出土状況
４号住居跡調査状況
写真図版　６　５号住居跡全景
５号住居跡セクション
５号住居跡カマド全景
５号住居跡調査状況
５号住居跡調査状況
写真図版　７　性格不明遺構セクション
性格不明遺構全景
５号土坑セクション
15号土坑セクション
７・14・21・22・29・30号土坑
土坑遠景(1)
土坑遠景(2)
１号溝
写真図版　８　１～３号住居跡出土遺物
写真図版　９　４・５号住居跡、
６～８・10・14・15・20・24・27号
土坑出土遺物
写真図版10　性格不明遺構、遺構外出土遺物

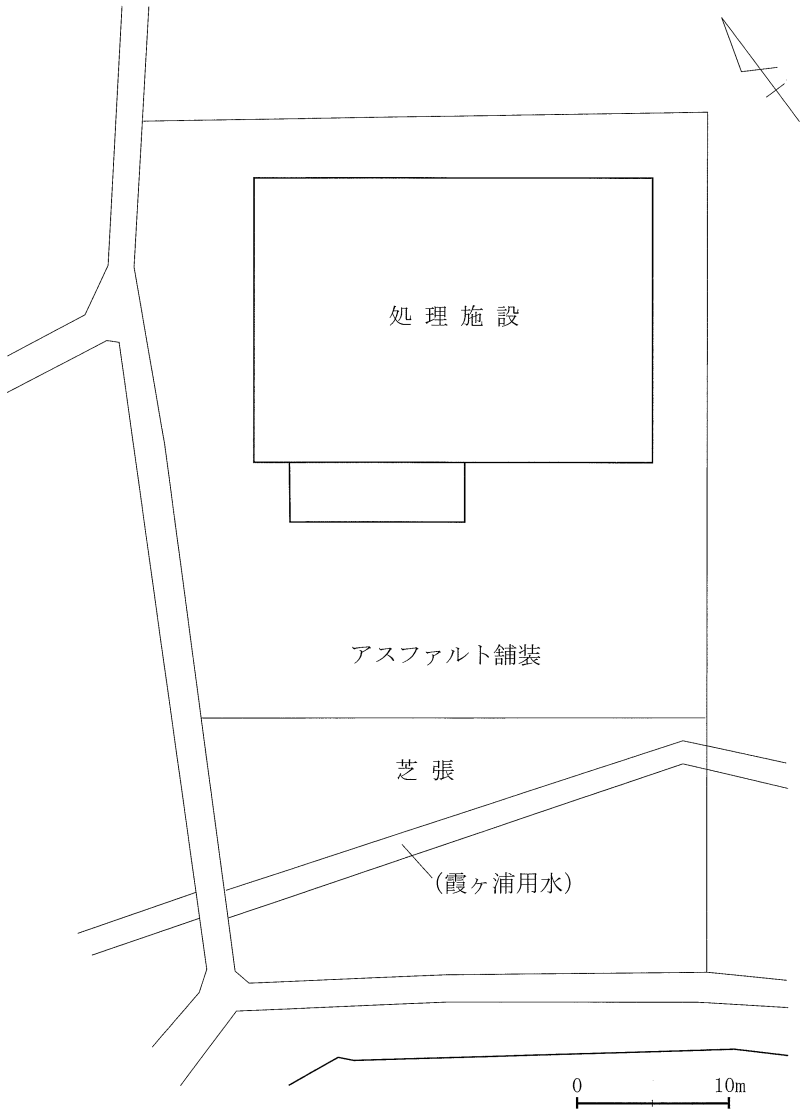
第1章　経　過

第1節　調査の経過

平成16年8月31日、八千代町上下水道課から農業集落排水事業川西南部地区処理施設建設にあたり、埋蔵文化財の照会があった。この地域には、平成11年から12年にかけての分布調査によって、奈良・平安時代の集落跡である小次郎内遺跡が確認されていることから、その取扱いについて協議を開始した。

まず、遺構の状況を確認するため、平成17年1月24日から1月28日かけて、八千代町教育委員会が試掘・確認調査を実施した。その結果、住居跡の可能性のある竪穴状遺構3基、土坑9基を確認し、平安時代の土師器や中世のかわらけ等の遺物も出土した。

処理施設建設は、建物部分は地下7.3ｍまで及ぶが、実際の工事では建物の周囲約2ｍの範囲全体を深さ約2ｍまで掘削することになり、完全に遺構が掘削されるため、その範囲は隣接する畑も含め発掘調査し記録保存することになった。その他の敷地はアスファルト舗装及び芝張りされるが、保護層を確保することができ、遺構は現状保存されることになった。



第1図　農業集落排水事業処理施設建設概要図

発掘調査は八千代町と㈱地域文化財コンサルタントで委託契約し、八千代町、八千代町教育委員会及び㈱地域文化財コンサルタントの三者で埋蔵文化財発掘調査の協定書を結び、平成17年12月26日、土木工事の通知を提出した。平成18年1月16日、茨城県教育委員会から「発掘調査」及び「工事立会」の通知を受け、平成18年9月11日発掘調査の届出、平成18年10月25日から発掘調査を開始した。

（山野井哲夫）

第２節　発掘作業の経過

平成 18 年 10 月下旬より表土掘削を開始し、月内に終了した。

表土掘削中に降雨の影響による水の湧出があり、調査区内に排水溝を設置し対処した。しかし、湧出量が多かったため、遺構検出作業を引き続き実施することは困難と判断し、水の湧出が収まるまで一時作業を中断させた。

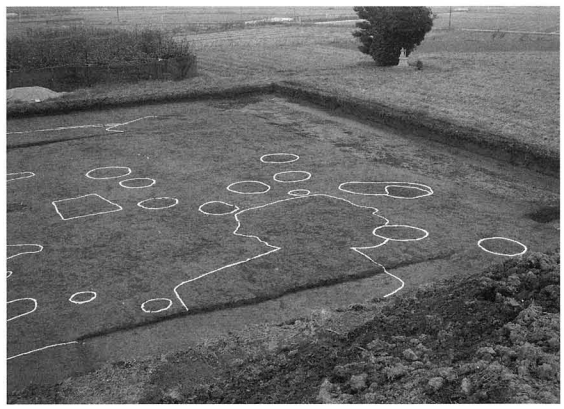
同年 11 月上旬より調査を再開し、遺構検出作業を行った。遺構は竪穴住居跡が５軒、土坑 34 基、性格不明遺構１基、溝状遺構１条が検出された。

遺構は重複関係にあるものが数箇所でみられたため、平面及び土層断面にて精査を行い、その重複関係の把握に努め調査を進行させていった。

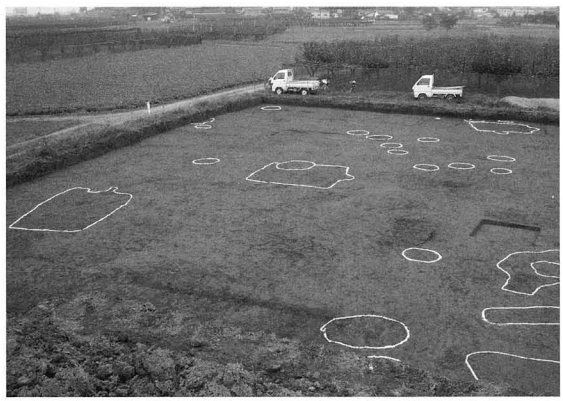
11 月中旬、遺構の調査が終了し、遺構全景の写真撮影を実施して発掘作業は終了した。

この後の下旬には現地説明会を開催し、多くの方々が訪れた。

翌日には現場施設の撤去を行い、同時に調査区内の埋め戻しを行い、調査が完了した。



遺構検出状況１　南から



遺構検出状況２　南から

遺構検出作業　西から

現場説明会　南から

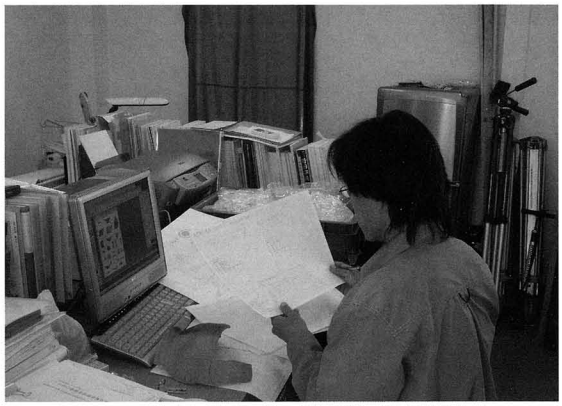
遺構調査　西から

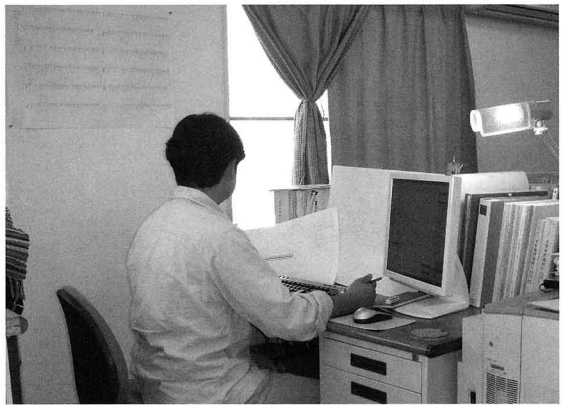
第３節　整理作業の経過

平成19年１月中旬から基礎整理作業として遺物の洗浄を開始し、遺物が乾燥した後に注記を行った。また、並行して遺構実測図面の整理を行い、グラフィックソフトを使用してトレースを実施し、デジタルデータとして保存を行い、同月下旬に作業を終了した。

同年１月下旬から遺物の接合・補強を行い、報告書掲載用実測対象遺物の選択を行った。引き続き遺物の実測及び実測図面のトレースを行い、併せて遺物の写真撮影を実施した。また、現場で撮影した写真の整理を行い、報告書掲載用写真の選択を実施した。

平成19年８月上旬からは上記の資料を基に、報告書の作成をDTPソフトウェアを用いて行い、同年９月28日に報告書の刊行に至った。





第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

八千代町は、関東平野のほぼ中央、茨城県県西地区に位置し、東は南流する鬼怒川に接している。北西部から南東部にかけて洪積台地である結城台地からなり、東部は沖積地である鬼怒川右岸の低地、南部は飯沼川の低地から結城台地の奥深くまで続く開析谷が形成されている。

小次郎内遺跡は、鬼怒川低地にあたる八千代町川西地区の大字新井に所在する。南側に幅約120ｍの鬼怒川旧河道を臨む標高24ｍから26ｍの台地上に立地する。現状は、鬼怒川旧河道の低地は水田、台地上は畑として利用されている。

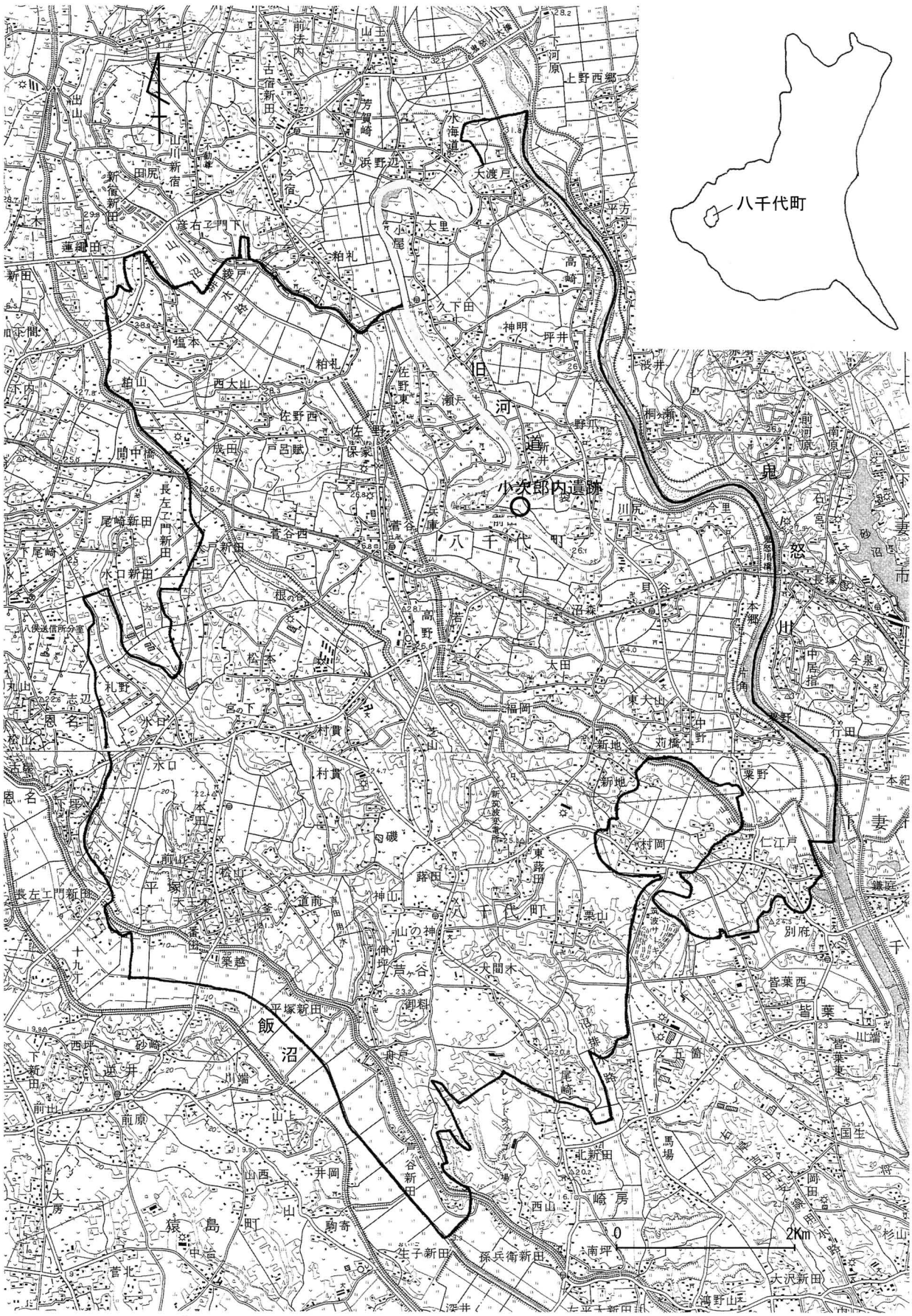
この旧河道跡は、神護景雲２年（768）に河川改修された跡と考えられている場所で、旧河道沿いには本遺跡も含め奈良・平安時代の遺跡が数多く立地する。　（山野井哲夫）

＊旧河道跡

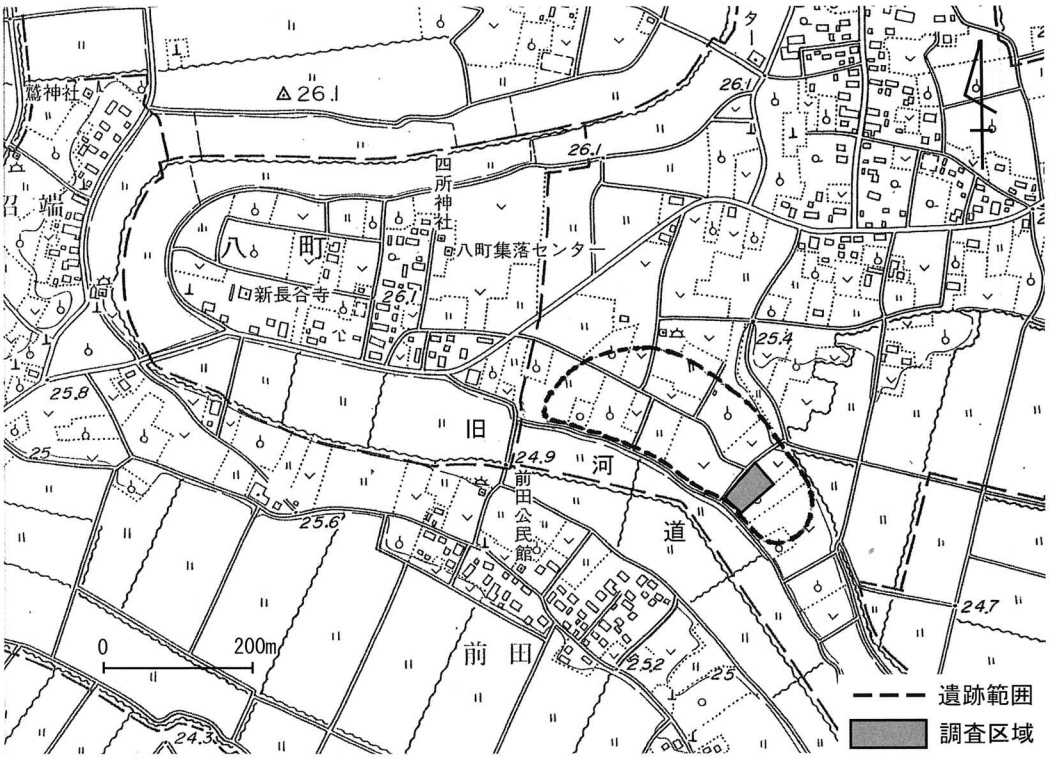
古代の鬼怒川は、八千代町の大渡戸付近で大きく西へ向きを変え、蛇行しながら南流し、八町で急激に東に屈曲し、袋・川尻あたりから北上し、野爪付近で現在の流れに戻る。そこから少し南流して東へ向きを変え、下妻市の砂沼の南側から現在の糸繰川を通り、小貝川に合流していた。この鬼怒川の流路が、古代の常陸国と下総国の国境となっていた。

＊参考文献

・『八千代町史　通史編』八千代町史編さん委員会 1987.3



第２図　遺跡位置図（国土地理院５万分の１地図を 80% 縮小）



第３図　遺跡周辺地形図（八千代町都市計画図１万分の１）

第２節　歴史的環境

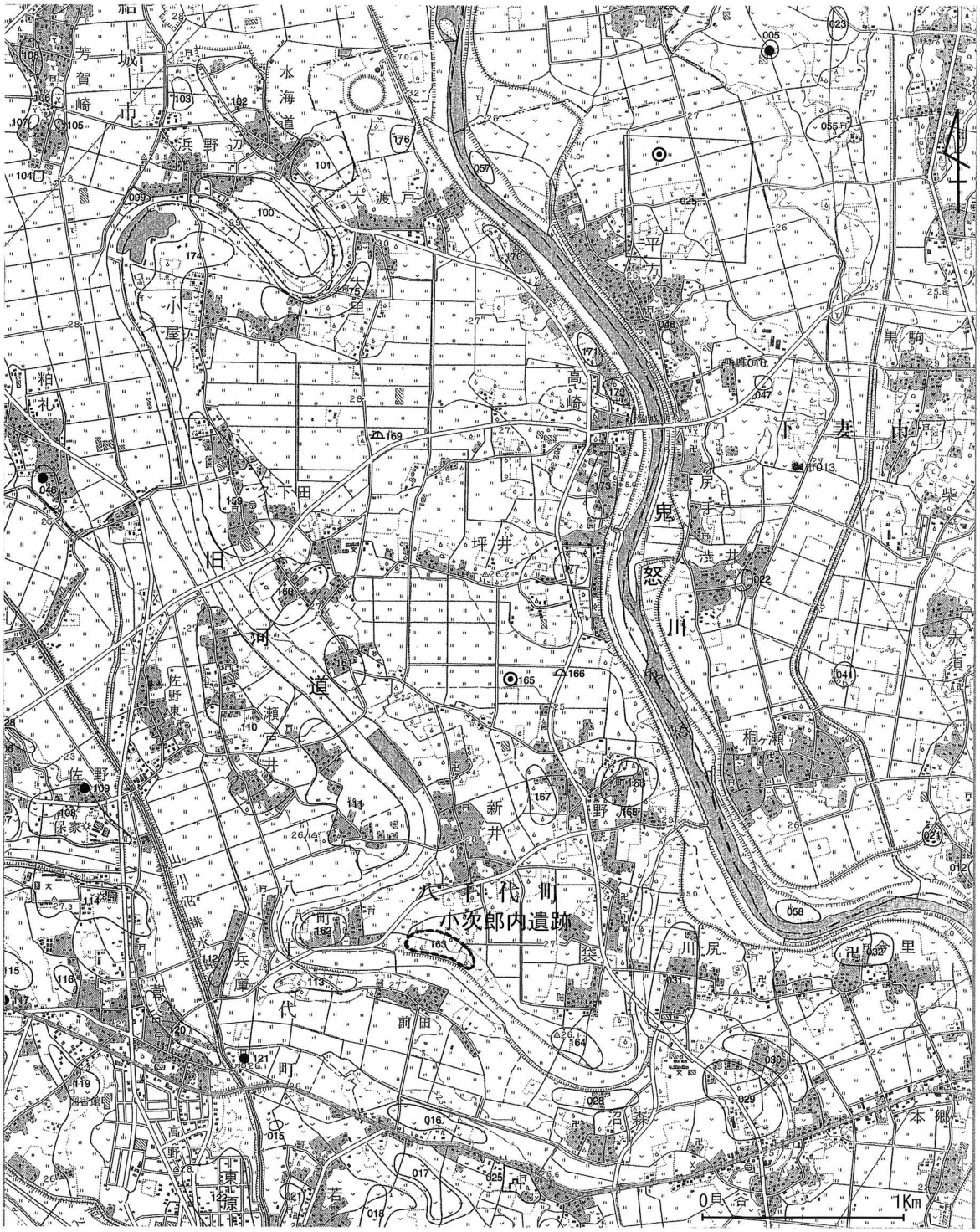
八千代町内には、現在 177 か所の遺跡が確認されているが、その多くは結城台地に複雑に入り込んだ谷津田沿いに立地し、鬼怒川沿いの低地に立地する遺跡は 32 か所に過ぎない。そのほとんどの遺跡が、鬼怒川の旧河道跡が残る八千代町川西地区に集中している。

この地域で縄文時代に遡る遺跡は、現在のところ野爪鹿嶋神社周辺遺跡（№168）のみで、古墳時代になっても５遺跡を数えるだけである。これらの遺跡が立地する場所は、鬼怒川低地の中にあっても比較的標高が高くなっている場所である。律令期になると、遺跡数は 28 か所と急激に増加する。これは、鬼怒川の河川改修によることが大きな要因と考えられている。

『続日本紀』の神護景雲２年（768）８月 19 日の条に、鬼怒川の河川改修に関する記録があるが、要約すると次のようになる。

「下総国司は、毛野川（鬼怒川）の度重なる氾濫によって口分田が被害を受けるため、河川改修を申請していたが、常陸国側では、新河川の予定地に神社や民家があるため、改修工事は延期されていた。しかし、毎年のように鬼怒川の洪水によって一郡の口分田二千余町が荒廃するに至って、下総国結城郡小塩郷小嶋村から常陸国新治郡川曲郷受津村にかけて一千丈の改修工事が着工された。」

この改修された場所が、現在の八千代町川西地区に残る旧河道跡と考えられている。改修工事が延期された理由に「神社」があることが記されているが、この地域で鬼怒川に隣接した創建の古い神社は、大同元年（806）藤原音麻呂の創建と伝えられる野爪の鹿嶋神社がある。時期的にずれがあるが、記録に出てくる「神社」との関わりが考えられる。また被害にあった「一郡の口分田」とは、下総国岡田郡の口分田と考えられるが、この地域の低地遺跡は、現在わずかに４か所しか確認されていない。洪水によって埋没している可能性が考えられる。改修によって鬼怒川の西側に位置することとなった地域（川西地区）は、改修後も国境は変える



第４図　周辺遺跡分布図（茨城県遺跡地図 1/25,000 を 80% 縮小）

（　）内は遺跡の時代：縄＝縄文時代、古＝古墳時代、奈平＝奈良・平安時代、中＝中世、近＝近世

○旧河道右岸

110 瀬戸井上遺跡（奈平・中近）
111 瀬戸井下遺跡（奈平・中近）
112 青木田遺跡（近）
113 沼畑前遺跡（奈平・中）
028 沼森本田遺跡（奈平・中）
029 小滝前遺跡（古・奈平・中近）
030 小滝後遺跡（古・奈平・中）
031 川尻北遺跡（古・奈平・中）

○旧河道左岸

175 大里北遺跡（奈平・中近）
174 小屋遺跡（奈平・中近）
159 遠上遺跡（古・奈平）
160 久下田本田遺跡（奈平・中近）
161 川村遺跡（奈平）
162 堂山遺跡（奈平・中）
163 小次郎内遺跡（奈平・中近）
164 宮東遺跡（奈平）

○鬼怒川右岸

176 六方寺遺跡（奈平）
170 宮西遺跡（奈平・中近）
171 後山北遺跡（奈平・中近）
172 後山南遺跡（奈平・中近）
173 出羽内遺跡（奈平・中近）
177 内海道遺跡（奈平・中）
167 八幡前遺跡（奈平）
168 野爪鹿嶋神社周辺遺跡（縄・古・奈平・中）
032 寺ノ前遺跡（円福寺跡の推定地）

ことなく常陸国とされ、昭和30年合併により八千代村となるまで、川西地区は真壁郡に属していた。

改修後の旧河道跡は、耕地として開発されるに伴い、遺跡が成立してきたと考えられる。旧河道左岸の常陸国側には、本遺跡を含め大里北遺跡（No.175）、小屋遺跡（No.174）、遠上遺跡（No.159）、久下田本田遺跡（No.160）、堂山遺跡（No.162）、宮東遺跡（No.164）など、旧河道右岸の下総国側には、瀬戸井上遺跡（No.110）、瀬戸井下遺跡（No.111）、沼畑前遺跡（No.113）、沼森本田遺跡（No.028）、川尻北遺跡（No.031）などがあり、現在の集落とも重なり規模の大きい遺跡が営まれていた。また、鬼怒川右岸に立地する内海道遺跡（No.177）は、県道拡幅に伴い茨城県教育財団が平成15年に発掘調査を実施した遺跡である。調査は26㎡と狭い範囲であったが、奈良時代及び平安時代の竪穴住居跡が各1軒確認され、土師器の坏、甕、椀などが出土した。

旧河道跡より小次郎内遺跡と筑波山を望む

10世紀になると、八千代地方も平将門が活躍した舞台となる。『将門記』には多くの地名が登場してくるが、八千代地域では芦津江（八千代町芦ヶ谷）、栗栖院常羽御厩（八千代町栗山）、堀越の渡（八千代町仁江戸）、広河の江（飯沼付近）などの地名が見られる。また承平5年（935）に平将門と平良正が戦った新治郡川曲村は、常陸国と下総国の国境地帯であった川西地区といわれている。

川西地区には、高崎の福寿院、八町の新長谷寺、今里の円福寺跡など、中世に遡る寺院がある。高崎の福寿院には、鎌倉時代初めに制作された木造阿弥陀如来坐像や鎌倉時代末の絹本著色両界曼荼羅図などが残されている。

八町の新長谷寺は、寺伝によると、貞永元年（1232）源頼朝に仕えていた結城朝光が、鎌倉から持ち帰った十一面観音菩薩像（*）をこの地に安置するため、堂宇を建立させたことが寺の由来と伝えられている。この新長谷寺一帯は鬼怒川の旧河道が急激に屈曲し、北・南・西側を低地に囲まれた所で、奈良・平安時代から中世にかけての堂山遺跡（No.162）が確認されている。南北朝時代には、この地形を利用して砦も築かれていた。北朝側の武将高師冬が、南朝側の駒城（下妻市）を攻略するための拠点として、四つの砦を築いたとされるが、そのうちの一つである八丁目の砦が現在の八町新長谷寺一帯の地と考えられている。

現在下妻市にある円福寺は、もと八千代町今里にあった。『円福寺記録』（円福寺蔵）によれば、足利尊氏の兄高義が、下総国大方郡今里郷の香取神社の傍らに寺院建立を願っていたが果たされず、その後鎌倉公方足利氏満によって、応永元年（1394）に香取神社の別当寺として創建されたと伝えられている。それから南北朝時代から戦国時代にかけて、鎌倉公方、古河公方の「祈願所」として外護されてきたが、元亀2年（1571）北条氏の侵攻により円福寺は焼失し、下妻の多賀谷氏によって現在の地に移建された。八千代町の今里には香取神社が残っているが、周辺は奈良・平安時代から中・近世にかけての寺ノ前遺跡（No.032）が確認されており、中世寺院円福寺跡の推定地と考えられている。　（山野井哲夫）

＊八町の新長谷寺の本尊である十一面観音菩薩立像は、鎌倉時代の制作と考えられていたが、平成14年の保存修理の際、内刳り部の墨書銘から、制作年が貞和6年（1350）、仏師名が院祥であることが確認された。

＊参考文献
・『八千代町史　通史編』八千代町史編さん委員会 1987.3
・『茨城県遺跡地図・地名表』茨城県教育委員会 2001.3
・『内海道遺跡』（財）茨城県教育財団 2004.3
・『八千代町の文化財』八千代町教育委員会 2007.3

第３章　調査の概要

第１節　試掘・確認調査の概要

試掘調査は、処理施設の敷地となる４筆（約 2,000 ㎡）を対象とし、幅２ｍ、長さ 10 ｍの調査区を９か所設定して実施した。この場所は遺跡として確認する以前に、霞ヶ浦用水の配管が敷設されており、試掘調査中７トレンチは、表土除去の段階で配管敷設にかかる砂層が露出したため、調査区から除外した。

調査の結果、２・３・５・６・８トレンチから土坑９基、竪穴状の遺構３基を確認した。土層の基本的な堆積状況は、①表土層、②暗褐色土層、③黄褐色土層、④ローム層、⑤明褐色粘土層である。遺構確認面は③黄褐色土層上面で、地表から 45cm ～ 50cm の深さである。なお、⑤明褐色粘土層で地表から約 1.2 ｍのところで水が湧き出てきた。

竪穴状遺構は３トレンチから２基、５トレンチから１基確認した。５トレンチの竪穴状遺構は長軸で４～4.5 ｍあり、住居跡と判断された。またこの竪穴状遺構（５号住居跡）の覆土上面から、内面が黒色処理され丁寧に磨かれた土師器の坏片、高台付坏片（第 23 図７）が出土した。

土坑は、２・５・６・８トレンチから９基確認した。直径１ｍ前後でほぼ円形を呈する。２トレンチの土坑２基について土層を確認するため深さ約 20cm まで半裁したが、覆土は非常に固くしまった土である。

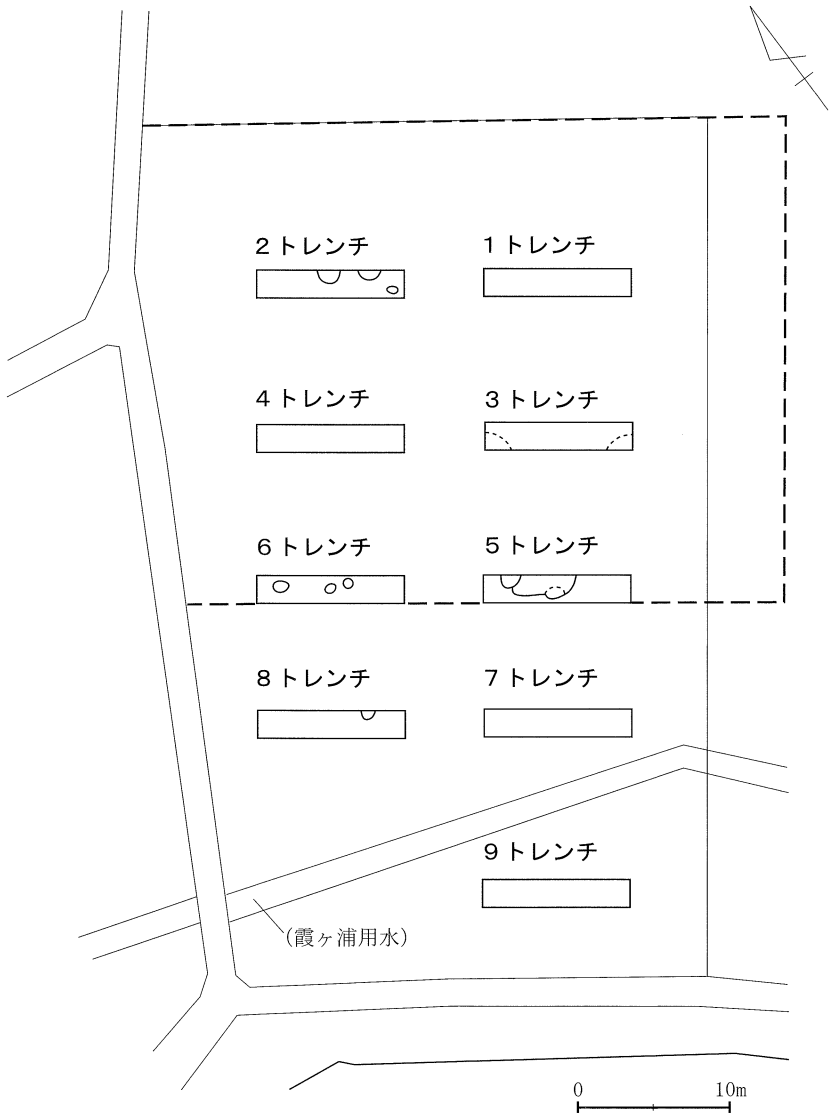
出土遺物は少なくほとんどが小片であるが、５トレンチから出土した土師器や、小片の中には中世の土師質土器やかわらけと思われるものも含まれていることから、今回試掘調査した地域は、平安時代後半から中世にかけての遺跡と判断された。竪穴状遺構については、平安時代の住居跡、あるいは中世の遺構の可能性も考えられる。また土坑については、覆土が非常に固くしまっており人為的に埋め戻されたと考えられ、調査区域全体に確認できたことから、掘立柱建物跡の存在も想定された。発掘調査にあたっては、これら竪穴状遺構及び土坑の性格を確認することが大きな目的となった。

（山野井哲夫）

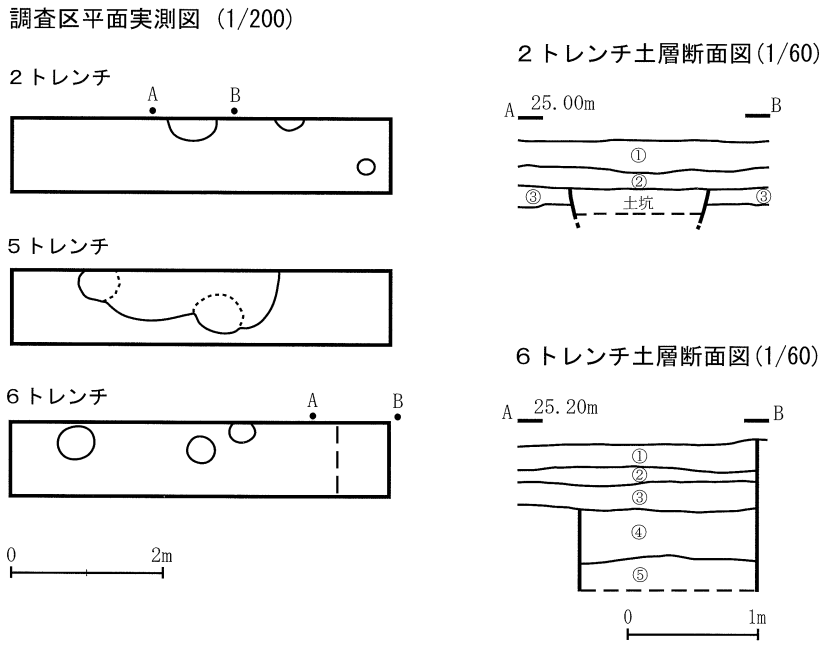
＊参考資料

・『試掘調査報告書』

八千代町教育委員会　2005.3



第５図　　試掘・確認調査区位置図（－－－発掘調査範囲）



第６図　試掘・確認調査実測図

第２節　発掘調査の概要

調査は、眼下に鬼怒川の旧河道を臨む左岸台地上に広がる遺跡の南部分において実施されたものである。調査区の面積は1,320㎡で地勢はほぼ平坦であり、標高は24～26ｍを図る。堆積土層は、畑とし利用されていたため表土は耕作土となり、これを除去した段階で粘性を帯びた黄褐色土層となる。遺構検出面はこの黄褐色土層であるが耕作により上部を削平されているものと判断される。

検出された遺構は、平安時代に営まれた竪穴住居跡５軒、性格不明遺構１基、土坑34基、近世の所産とみられる溝状遺構１条で、調査区の全域にわたって分布する。竪穴住居跡の平面形態はやや歪みをもった方形であり、カマドを通る主軸方向が長い、いわゆる縦長の長方形で占められていた。さらに、カマドの向って左側には平面方形で掘り込まれた張り出しが認められ、本遺跡における特徴的な構造となっている。主軸方向はN-10°－ＥとＮ-98～120°－Ｅに大別でき、カマドの形態も煙道を短く収めるものと長く屋外へ掘り込む二者がみられた。土坑は調査区の中央から南東へかけて比較的集中しているが、規則性はみいだせない。平面形態は円形ないし楕円形で、径及び深度が１ｍを超えるものが多く、井戸の可能性のある土坑も確認された。土坑は、住居跡と共に集落を構成したとみられるが、重複関係が認められることからも数次期にわたる遺跡の機能時期が明らかとなっている。

遺物は収納箱４箱分で、古墳時代前期の所産と考えられる土師器（器台・甕）、土製品（手捏土器）、古墳時代後期～奈良・平安時代の所産と考えられる土師器（甑）、石製模造品（有孔円板）が含まれるものの、主体となるのは平安時代の土器類で、土師器（坏・耳皿・埦・甕）、須恵器（瓶・甕）、瓦、石製品（砥石・支脚）、鉄製品（不明品）が出土している。これらの遺物を基にすると、住居跡には９世紀後葉～11世紀前葉の年代が与えられ、今回はこの時期に営まれた集落の一部を調査したものである。

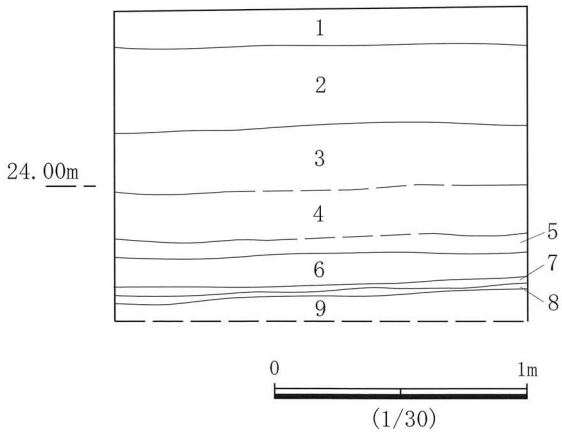
発掘調査前　　筑波山を望む

第３節　層序

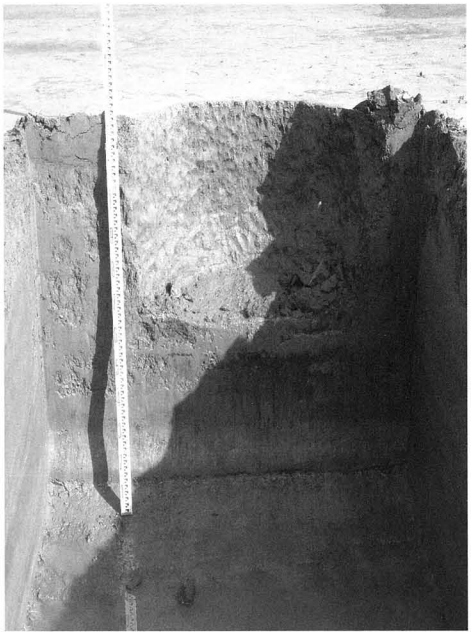
基本堆積土層の観察は調査区の中央西寄りにて行った。表土は灰褐色の耕作土で、「第７図　基本堆積土層図」は表土を除去した状態での掲載である。

遺構検出面は１層（黄褐色土層）の上面であり、水分を多く含むと粘性が非常に強くなり、乾燥すると硬化性が増大する土質であった。

下層になるにつれ土壌は水分を多く含有し、５層以下では水の湧出がみられた。



1. 2.5Y5/4 黄褐色土
2. 2.5Y4/4 オリーブ褐色土
3. 2.5Y4/5 オリーブ褐色土
4. 10YR4/4 褐色土
5. 7.5YR5/6 明褐色粘土
6. 2.5Y6/2 灰黄色粘土
7. 10YR4/4 褐色粘土
8. 2.5Y5/4 黄褐色粘土
9. 2.5Y5/6 黄褐色粘土



第７図　基本堆積土層図

Y6520
Y6540
Y6560
Y6580
X21540
X21520
X21500
N
1 号土坑
2 号土坑
34 号土坑
4 号土坑
5 号土坑
6 号土坑
3 号住居跡
13 号土坑
基本堆積土層
3 号土坑
31 号土坑
8 号土坑
1 号溝
10 号土坑
11 号土坑
9 号土坑
12 号土坑
2 号住居跡
4 号住居跡
32 号土坑
24 号土坑
1 号住居跡
15 号土坑
16 号土坑
14 号土坑
17 号土坑
23 号土坑
25 号土坑
7 号土坑
18 号土坑
20 号土坑
29 号土坑
22 号土坑
19 号土坑
30 号土坑
性格不明遺構
21 号土坑
33 号土坑
26 号土坑
5 号住居跡
27 号土坑
28 号土坑
0
10m
1/200

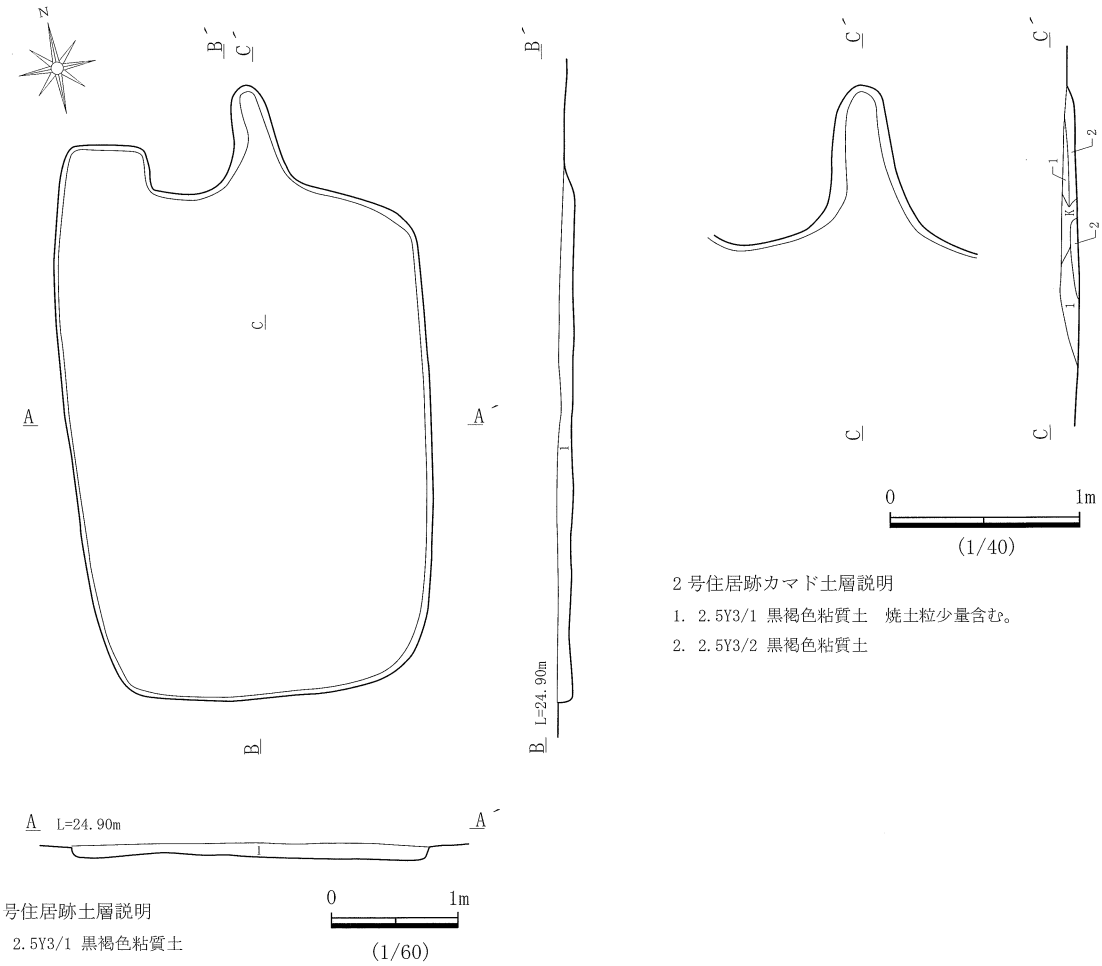
第８図　調査区全測図

第４章　遺構と遺物

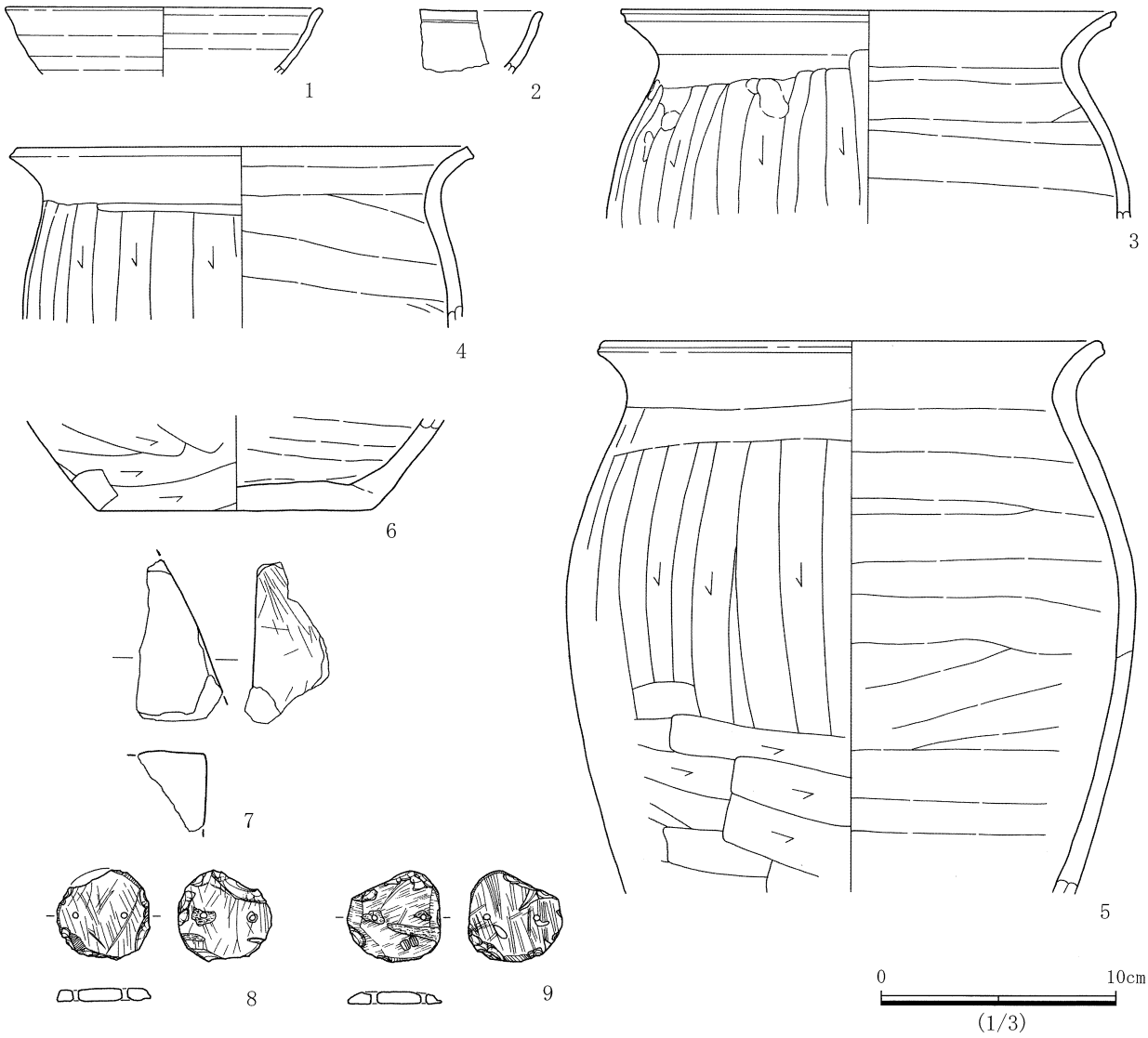
第１節　竪穴住居跡

１号住居跡　（第９・10図、写真図版２・８）

調査区の南西部に位置し、北東の２号住居跡と４ｍの距離をとる。黄褐色土層を基盤として構築され、平面形態は主軸方向が長い隅角に丸味をもった長方形で、カマドが付設された北壁の西角が平面方形に張り出す。規模は長軸が南北軸で3.95ｍ、東西軸2.90ｍ、確認面からの深さは10～14㎝を測る。張り出し部は、東西0.73ｍ、南北0.35ｍである。主軸方向はＮ-10°－Ｅを示す。壁は掘り込みが浅いため判然としないがほぼ垂直に立ち上がる。床面は直床で多少の起伏があり、壁際がやや低くなる。硬化面は認められず、ピット及び壁溝などの施設は確認されていない。カマドは北壁の中央に屋外へかけて構築され、主軸は住居跡と若干ずれてＮ－０°方向を示す。規模は全長85㎝、最大幅40㎝である。煙道は長く突出するものの燃焼部との境は明瞭ではなく、火床面も認められない。天井部は残存せず、袖あるいは構材についても確認できなかった。カマド内の堆積土は住居跡内と同様に粘性の強い黒褐色土であり、若干の砂質土も使用していたとみられるが詳細は明ではない。覆土はにぶい黄色粘質土を含んだ黒褐色粘質土の単層である。遺物は収納箱約１/10箱分が出土している。出土状態は住居跡の南側と壁際に比較的まとまりをみせ、土師器が主体となり埦・甕がみられる。このほか緑釉陶器埦や石製模造品の有孔円板が出土した。遺物図版番号８・９の有孔円板は流れ込みと判断される。図示した遺物では、１の土師器埦が住居跡の南東角、２の緑釉陶器埦が南西部、４・５の土師器甕が北東角と西部、６の土師器甕が南西角の出土である。時期については、住居跡の形態及び出土遺物から９世紀後葉～10世紀前葉頃としておく。



第９図　１号住居跡



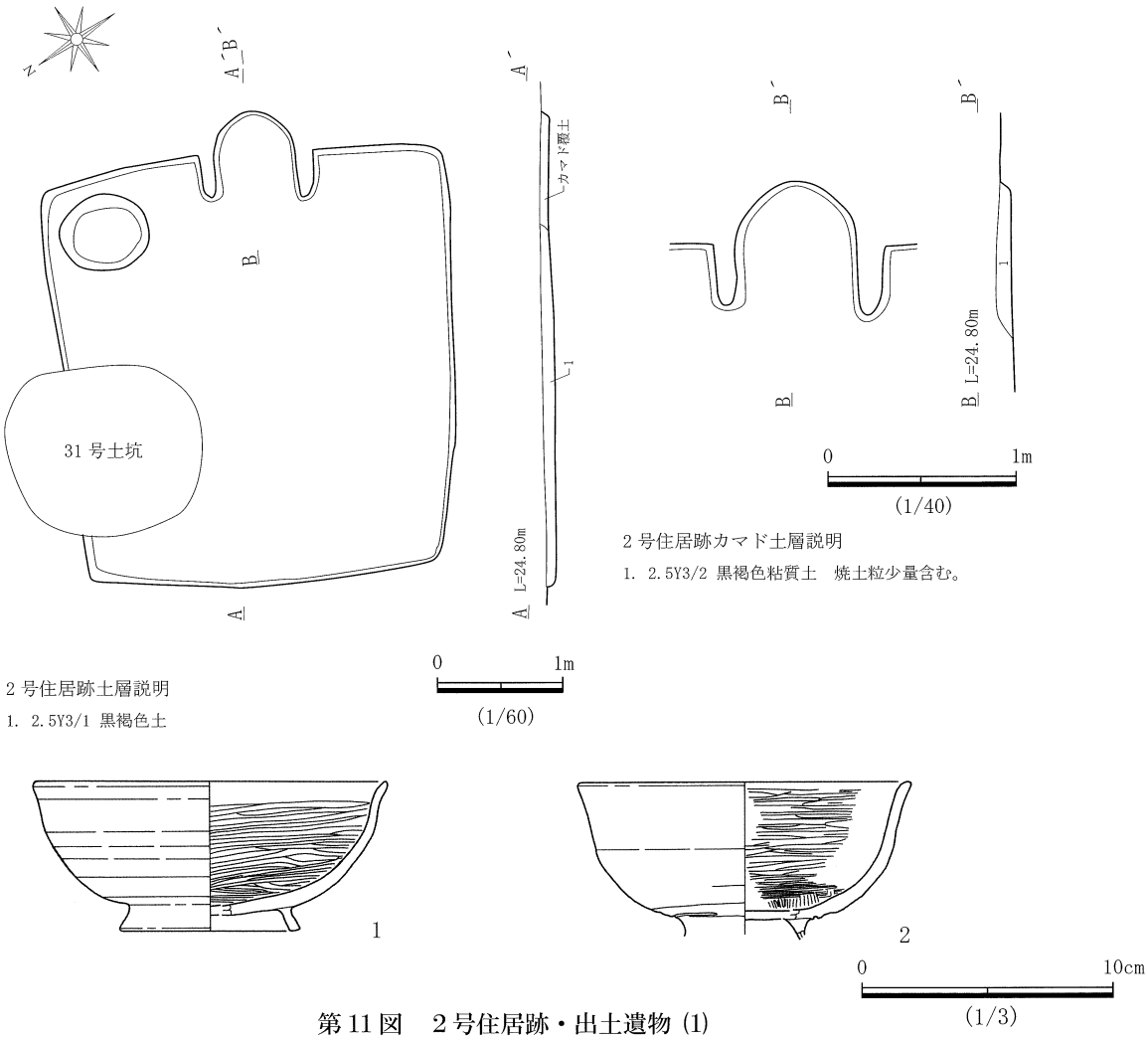
第10図　1号住居跡出土遺物

第1表　1号住居跡 出土遺物観察表

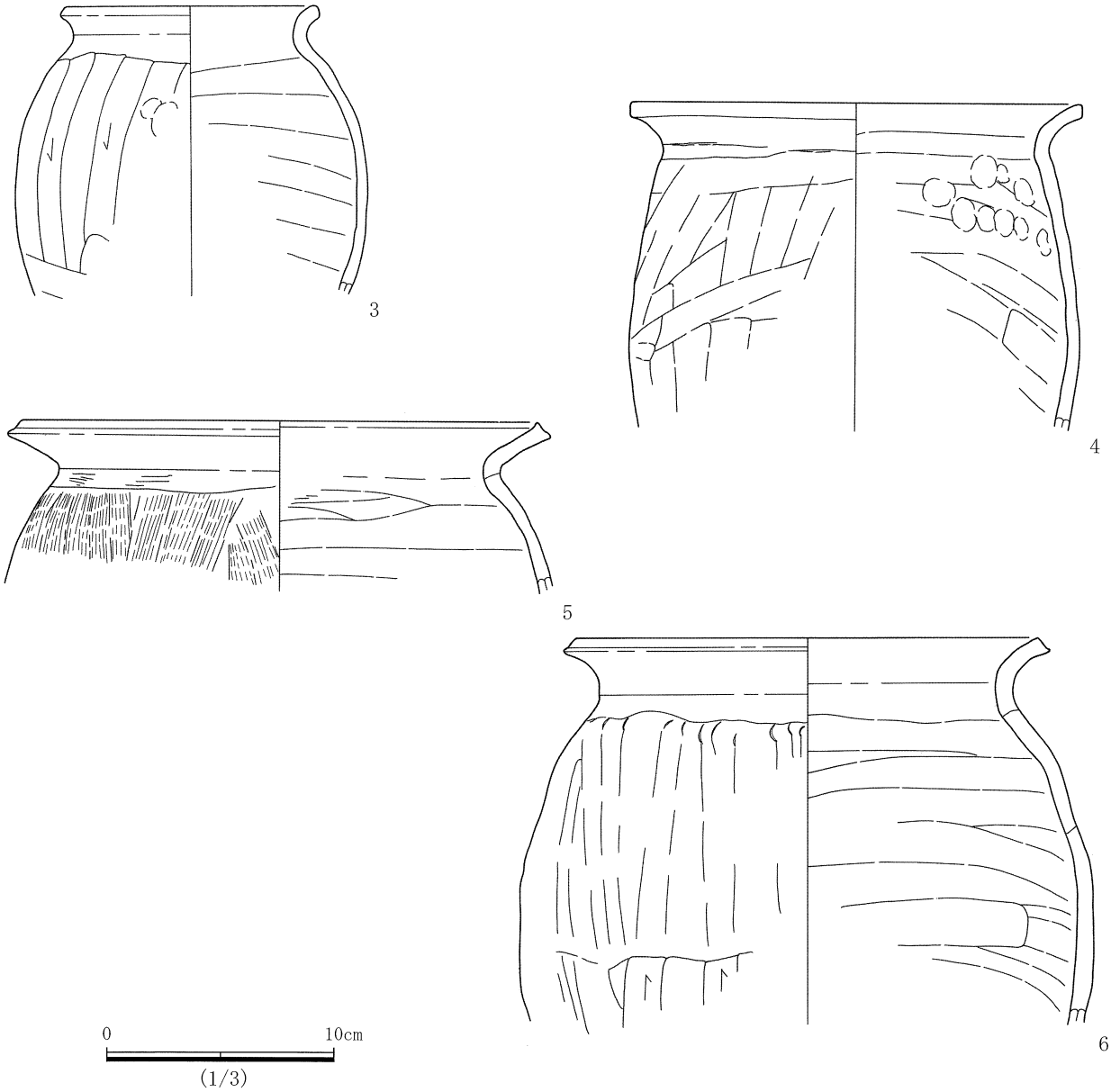
遺構	No.	種類	器種	注記	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1号住	1	ロクロ土師器	埦	163-SI01 No.19	(13.5)	[2.8]	—	体部は丸みを持ち、口縁部はわずかに外反。	ロクロ整形。	内面 10YR5/2 灰黄 外面 10YR8/3 浅黄橙	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	小破片。
1号住	2	緑釉陶器	埦	163-SI01 No.37	—	—	—	体部は丸みを持つ。	ロクロ整形。内外面に緑釉施釉。	内外面 7.5Y5/3 灰オリーブ	堅緻。	良好	小破片。
1号住	3	土師器	甕	163-SI01 No.08・40	(20.9)	[8.7]	—	口縁部は外反して開く。口唇部に凹線1条巡る。	外面、口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	内面 10YR7/3 にぶい黄橙 外面 10YR7/4 にぶい黄橙	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	
1号住	4	土師器	甕	163-SI01 No.18	(19.0)	[7.3]	—	口縁部は外反して開く。口唇部面取り。	外面、口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	内面 5YR6/6 橙 外面 2.5YR5/8 明赤褐色	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	
1号住	5	土師器	甕	163-SI01 No.05・一括	(21.6)	[23.5]	—	口縁部は外反して開く。口唇部に凹線1条巡る。	外面、口縁部ヨコナデ。胴部上位は縦位の下位は横位のヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	内面 7.5YR6/6 橙 外面 7.5YR5/3 にぶい褐	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	
1号住	6	土師器	甕	163-SI01 No.33	—	[3.8]	(11.6)	平底の底部から胴部は直線的に開く。	外面、胴部ヘラケズリ、底部一部ヘラケズリ。内面、胴部指ナデ、底部指頭圧痕。	内外面7.5YR4/2 灰褐	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	
1号住	7	石製品	砥石	163-SI01 D一括	長さ[6.9] 幅[3.6] 厚さ[3.4] 重量[53.95g] 石材:流紋岩								
1号住	8	石製品	有孔円板	163-SI01 No.01	長さ2.6 幅2.6 厚さ0.35 重量[4.12g] 孔径:0.2 石材:蛇紋岩 備考:紛れ込み遺物。								
1号住	9	石製品	有孔円板	163-SI01 No.02	長さ2.5 幅2.6 厚さ0.35 重量4.54g 孔径:0.2 石材:蛇紋岩 備考:紛れ込み遺物。								

２号住居跡　（第 11・12 図、写真図版３・８）

調査区の西部に位置し、北東の３号住居跡と 12 m、南西の１号住居跡と４ｍの距離をもつ。31 号土坑と重複し本跡が古く、住居跡北壁の西寄りが壊されている。黄褐色土層を基盤として構築され、平面形態はやや歪んでいるが正方形に近い。規模は長軸が東西軸で 3.45 m、南北軸 3.15 m、確認面からの深さは６～ 10 cmを測り、主軸方向はＮ -120°- Ｅを示す。壁は掘り込みが浅いため判然としないが緩やかに立ち上がるとみられる。床面は直床でほぼ平坦となる。硬化面は認められず、ピット及び壁溝は確認されていない。カマドは東壁の中央に屋外へかけて構築され、北東隅に貯蔵穴と判断される掘り込みを伴う。カマドの主軸は住居跡と同一であり、規模は全長 72 cm、最大幅 65 cmである。煙道は突出するものの短く、先端は緩やかに立ち上がる。燃焼部との境は不明瞭で、火床面も認められない。天井部は残存せず、袖基部は地山を削り残した造り袖である。カマド内の堆積土は住居跡内と同様であり構材は認められていない。貯蔵穴は平面が楕円形であるものの下端をみるとやや方形気味で、住居跡内と同じく粘性を帯びた黒褐色土の堆積が確認される。規模は上端で 73 × 61 cm、深さ 16 cm、下端で 55 × 44 cmを計測する。住居跡内の覆土はにぶい黄色粘質土を含んだ黒褐色粘質土の単層である。遺物は収納箱約１/10 箱分が出土している。出土状態は住居跡の南東部に比較的まとまりをみせ、土師器の埦・甕を図示した。遺物図版番号１・２は高台付埦で底径が小さく体部は深い。内面にヘラミガキ及び黒色処理を施し、１はカマド内、２は南西部よりの出土である。３～６は甕で、５が口縁端部がやや上方につまみ上げられる。３・５は南東部、４は南東部と北西部、６は中央部からの出土であった。時期については、出土遺物の形態から 10 世紀前葉頃の年代が与えられる。



第 11 図　２号住居跡・出土遺物 (1)



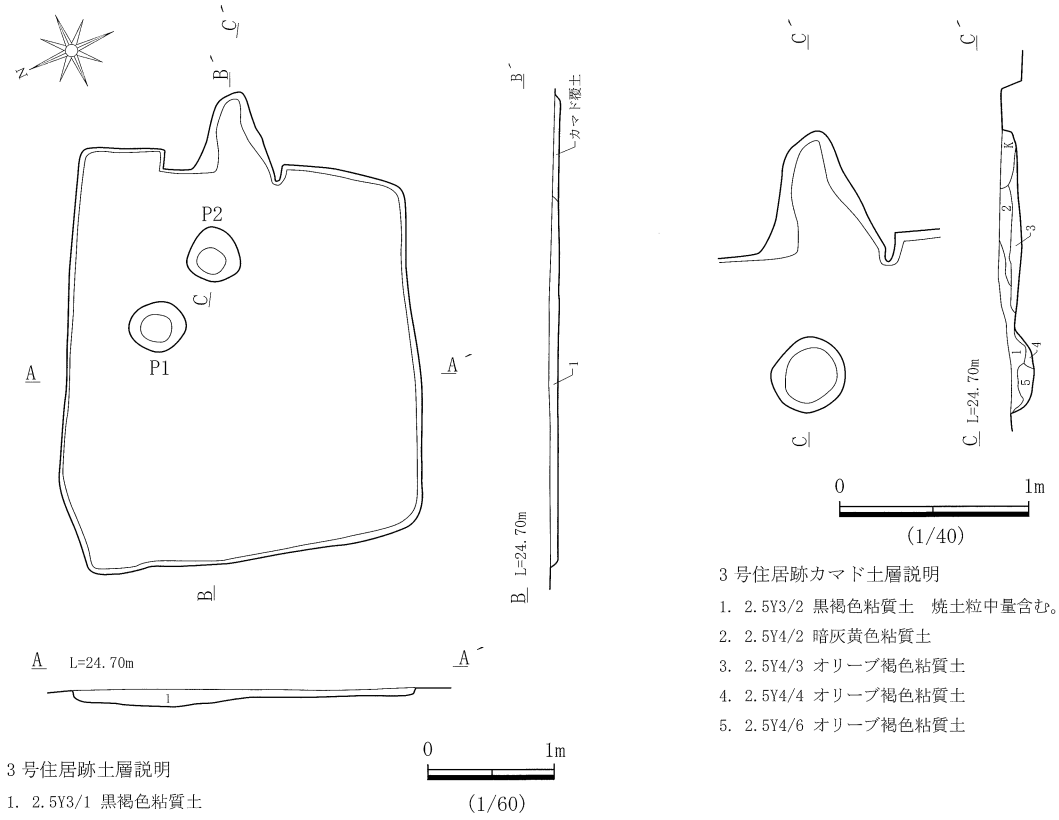
第12図　2号住居跡出土遺物 (2)

第2表　2号住居跡　出土遺物観察表

遺構	No.	種類	器種	注記	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
2号住	1	ロクロ土師器	埦	163-SI02 KA・No.02	(14.1)	6.0	(7.2)	体部は丸みを持ち、口縁部はわずかに外反。高台は外側に開く。	ロクロ成形。外面、体部下端手持ちヘラケズリ、内面、口縁部ヨコナデ、体部ミガキ。	内外面7.5YR6./6橙	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	
2号住	2	ロクロ土師器	埦	163-SI02 No.33・40	(13.2)	[6.1]	—	体部は丸みを持ち、口縁部はわずかに外反。	ロクロ成形。外面、体部下端手持ちヘラケズリ、内面、口縁部～体部ミガキ。	内面 10YR2/1黒 外面 6YR6/6橙	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	内面黒色処理。
2号住	3	ロクロ土師器	甕	163-SI02 No.27・30	(11.2)	[12.7]	—	口縁部は外反して開く。	外面、口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	内外面 5YR6/6橙	石英・チャート・白色粒・角閃石少量。	良好	
2号住	4	土師器	甕	163-SI02 No.01・36	(19.9)	[14.4]	—	口縁部は外反して開く。口唇部面取り。	外面、口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。内面、口縁部ヨコナデ、胴部ナデ・指頭圧痕。	内外面7.5YR6/6橙	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	
2号住	5	土師器	甕	163-SI02 No.18	(23.9)	[7.5]	—	口縁部は外反して開く。口唇部は上下にやや突出し、中央部がやや窪む。	外面、口縁部ヨコナデ、胴部木口状工具ナデ。内面、口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	内面 10YR5/3にぶい黄褐 外面 10YR5/2灰黄褐	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	
2号住	6	土師器	甕	163-SI02 No.06・07・08・09・10・11	(21.3)	[17.0]	—	口縁部は外反して開く。口唇部は下方がやや突出する。	外面、口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後、上位ナデ。内面、口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	内外面10YR6/4にぶい黄橙	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	

3号住居跡　（第13・14図、写真図版４・８）

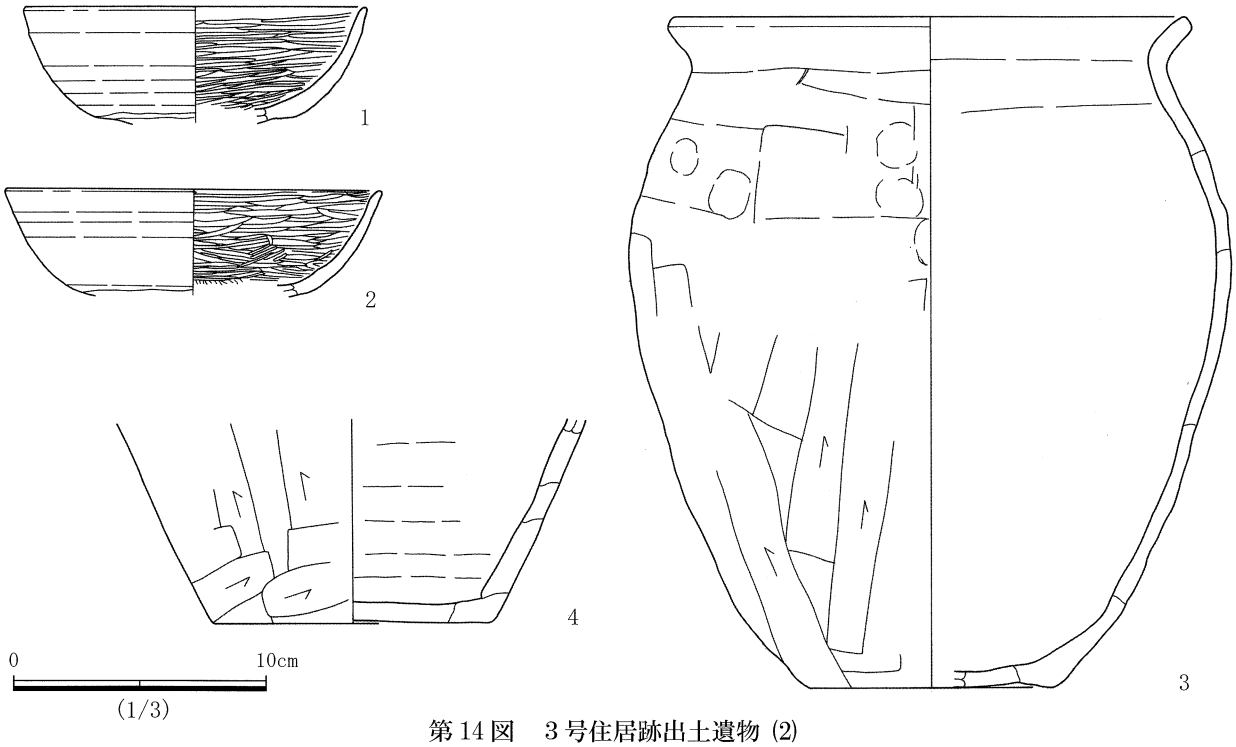
調査区の北部に位置し、南東の４号住居跡と10ｍ、南西の２号住居跡と12ｍの距離をもつ。黄褐色土層を基盤として構築され、平面形態はやや歪んでいるが主軸方向の長い長方形で、カマドが付設された東壁の北角が平面方形に張り出す。規模は長軸が東西軸で3.08ｍ、南北軸2.83ｍ、確認面からの深さは５～13㎝を測る。張り出し部は、東西0.17ｍ、南北0.65ｍである。主軸方向はＮ-115°-Ｅを示す。壁は掘り込みが浅いため判然としないがほぼ垂直に立ち上がる。床面は直床で多少の起伏があり、北部分がやや低くなる。硬化面は認められず、壁溝は確認されていない。ピットは住居跡中央の北東より２基が検出された。２基共に平面円形で掘り込みは浅い。規模はP1が44×43㎝、深さ18㎝、P2が45×40㎝、深さ20㎝である。カマドは東壁の中央に屋外へかけて構築され、主軸は住居跡と同一方向を示す。規模は全長142㎝、最大幅125㎝である。煙道は長く突出するものの燃焼部との境は明瞭ではなく、火床面も認められない。天井部は残存せず、袖基部は地山を削り残した造り袖である。カマド内の堆積土は粘性を帯びた暗灰黄色土とオリーブ褐色土であった。なお、住居跡内の覆土はにぶい黄色粘質土を含んだ黒褐色粘質土の単層である。遺物は収納箱約１/５箱分が出土している。出土状態は住居跡の中央部に比較的まとまりをみせ、土師器を主体としておりこのうち埦と甕を図示した。遺物図版番号１・２は高台付とみられる埦で、内面にヘラミガキ及び黒色処理を施す。共に中央部床面よりの出土である。３は、カマド内との接合資料で、破片は広く住居跡内に分布し、４は北西部の出土であった。時期については、出土遺物の形態から９世紀後葉～10世紀前葉としておく。



3号住居跡土層説明
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土

3号住居跡カマド土層説明
1. 2.5Y3/2 黒褐色粘質土　焼土粒中量含む。
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土
4. 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質土
5. 2.5Y4/6 オリーブ褐色粘質土

第13図　３号住居跡(1)



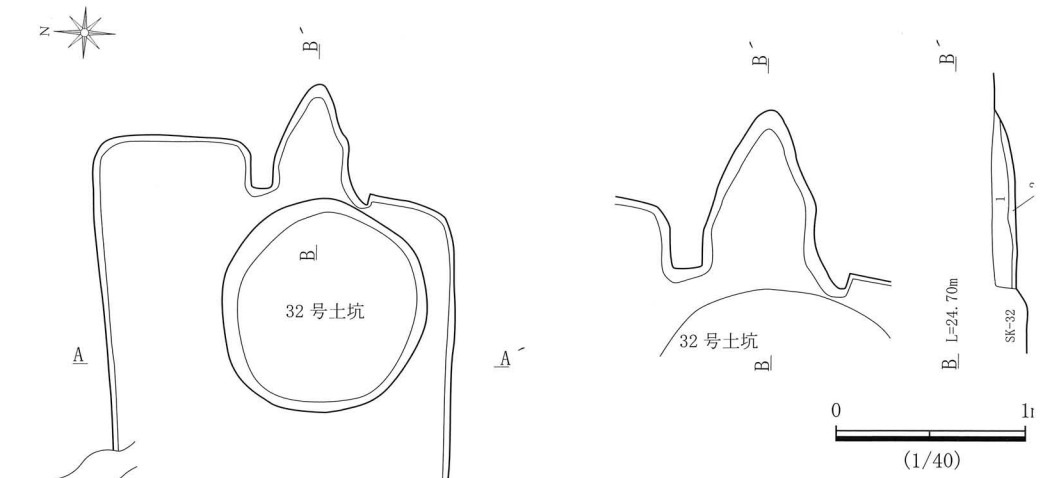
第14図　3号住居跡出土遺物 (2)

第3表　3号住居跡　出土遺物観察表

遺構	No.	種類	器種	注記	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
3号住	1	ロクロ土師器	埦	163-SI03 No.17	(13.6)	[4.6]	—	体部は丸みを持つ。	ロクロ成形。外面、体部下端手持ちヘラケズリ、内面、口縁部ヨコナデ、体部ミガキ。	内外面10YR5/4 にぶい黄褐	雲母・チャート・石英少量。	良好	
3号住	2	ロクロ土師器	埦	163-SI03 No.12・一括	(14.9)	[4.2]	—	体部は丸みを持ち、口縁部はわずかに外反。	ロクロ成形。外面、体部下端手持ちヘラケズリ、内面、口縁部～底部ミガキ。	内面 N2/ 黒 外面 10YR6/3 にぶい黄橙	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	内面黒色処理。
3号住	3	土師器	甕	163-SI03 No.01・02・10 22・67・75・77・80・82・85・KA	(20.7)	(26.5)	(9.8)	口縁部は「く」の字状に開く。胴部は上位に最大径を持つ。	外面、口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後、上位をナデ。内面、口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデだが摩滅が著しい。	内外面2.5YR5/6 明赤褐	雲母・チャート・石英少量。	良好	図上復元。
3号住	4	土師器	甕	163-SI03 No.01・18	—	[8.0]	(11.1)	胴部は直線的に開く。	外面、胴部ヘラケズリ、底部ナデ。内面、胴部ヘラナデ、底部ナデ。	内面 10YR6/4 にぶい黄橙 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	

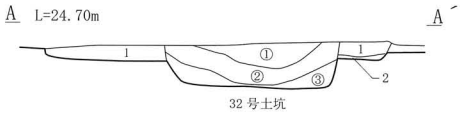
4号住居跡　（第15図、写真図版5・9）

調査区の北東に位置し、南の5号住居跡と18 m、北西の3号住居跡と10 mの距離をもつ。32号土坑と重複し本跡が古く、住居跡のカマド前面を大きく壊されている。黄褐色土層を基盤として構築され、平面形態はやや台形状となるが全体的にみれば主軸方向の長い長方形で、カマドが付設された東壁の北角が平面方形に張り出す。規模は長軸が東西軸で3.35 m、南北軸2.75 m、確認面からの深さは12 cmを測る。張り出し部は、東西0.45 m、南北1.25 mである。主軸方向はN -98°- Eを示す。壁は掘り込みが浅いため判然としないがほぼ垂直に立ち上がり、床面は直床でほぼ平坦である。硬化面は認められず、壁溝及びピットは確認されていない。カマドは東壁の中央に屋外へかけて構築され、主軸は住居跡と同一方向を示す。規模は全長95 cm、最大幅63 cmである。煙道は長く突出するものの燃焼部との境は明瞭ではなく、火床面も認められない。天井部は残存せず、袖基部は地山を削り残した造り袖である。カマド内から遺物図版番号5の片麻岩製の支脚が出土した。カマド内の堆積土は住居跡内と同様に粘性の強い黒褐色土を主体とする。なお、住居跡内の覆土はにぶい黄色粘質土を含んだ黒褐色粘質土である。遺物は収納箱約1/10箱分が出土している。出土状態はカマド内に集中しており、全体としては少量であるが、土師器の坏・埦・甕、石製支脚を図示した。遺物図版番号1の坏は皿状、2は足高高台の埦で、共にカマド内の出土である。3・4は甕で、3は口縁端部が面をなす。時期については、皿状の坏及び足高高台など出土遺物の形態から10世紀後葉の年代が与えられる。



4 号住居跡カマド土層説明

1. 2.5YR3/3 暗赤褐色粘質土　焼土粒中量含む。
2. 2.5Y4/3　オリーブ褐色粘質土



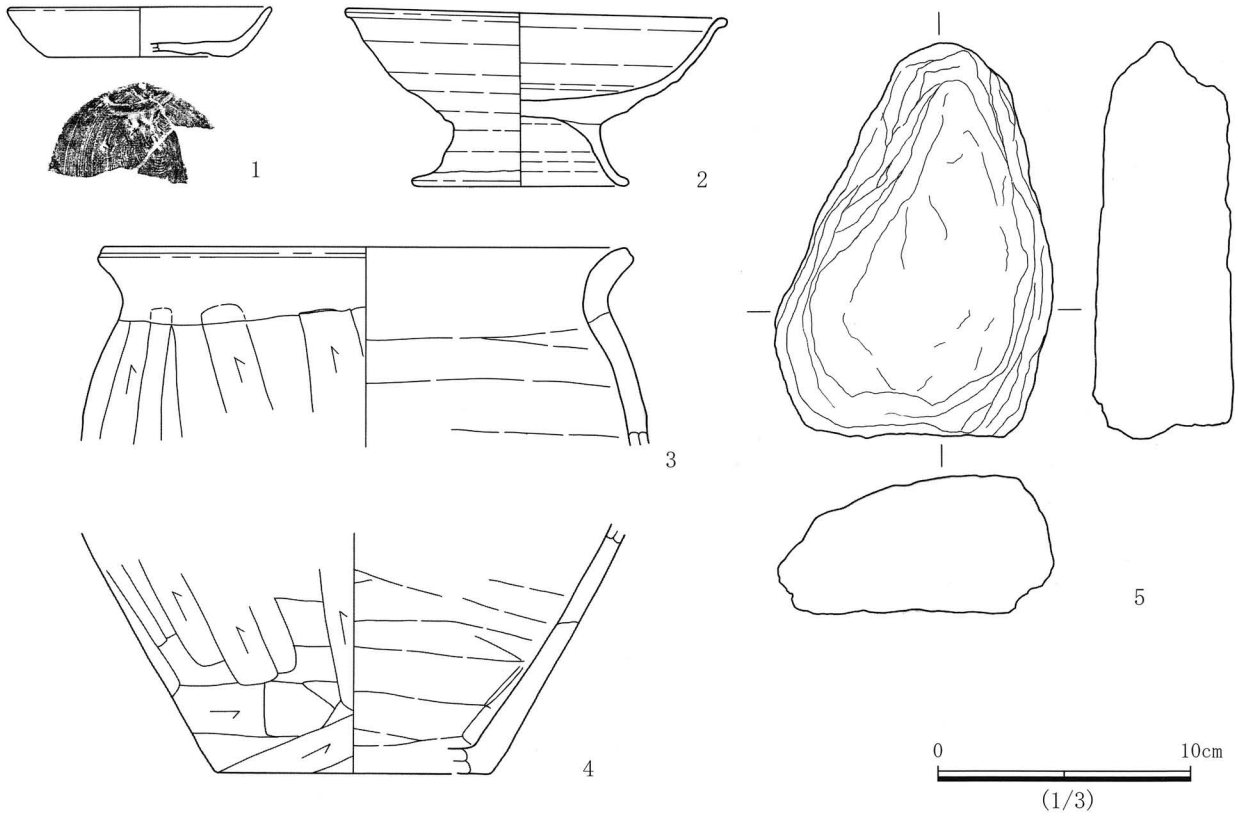
4 号住居跡土層説明

1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土
2. 2.5Y3/2 黒褐色粘質土

0　1m
(1/60)

32 号土坑土層説明

①. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土
②. 2.5Y3/2 黒褐色粘質土
③. 2.5Y4/2 暗灰黄褐色粘質土



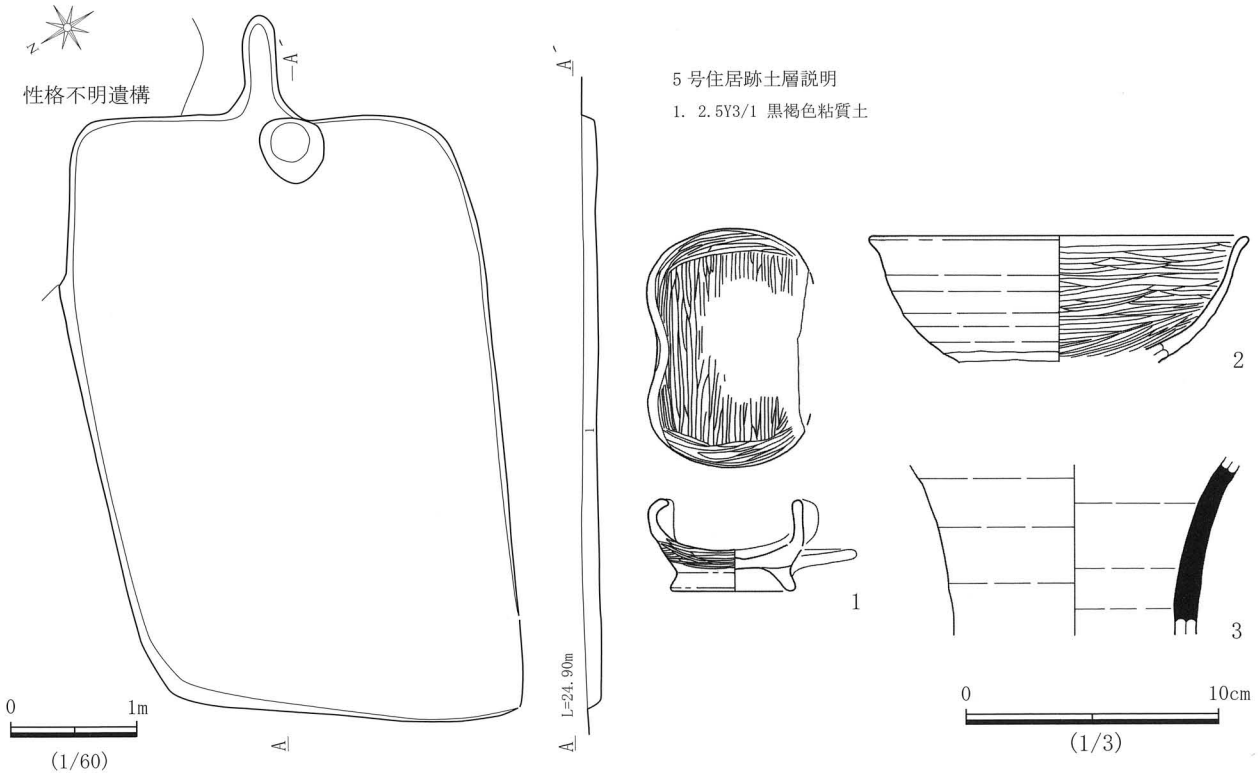
第 15 図　4 号住居跡・出土遺物

第４表　４号住居跡　出土遺物観察表

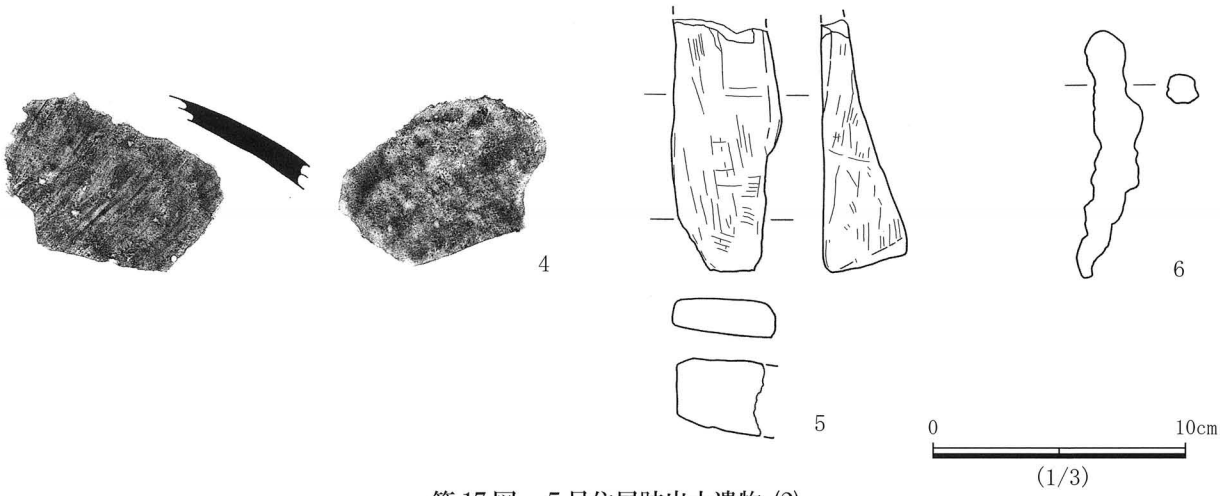
遺構	No.	種類	器種	注記	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
4号住	1	ロクロ土師器	小型坏	163-SI04 KA・一括	(10.5)	1.9	(7.3)	体部は直線的に開く。	ロクロ成形。底部、回転糸切り無調整。	内面 5YR6/6 橙 外面 7.5YR6/6 橙	石英・チャート・白色粒・角閃石少量。	良好	内外面に煤付着。
4号住	2	ロクロ土師器	埦	163-SI04 KA・SK32一括	15.1	7.1	8.6	口縁部は玉縁状。体部は丸みを持つ。高台は高く、裾部は外反する。	ロクロ成・整形。	内面 7.5YR6/4 にぶい橙 外面 7.5YR5/6 明褐	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	
4号住	3	土師器	甕	163-SI04 一括	(21.2)	[7.9]	―	口縁部は外反して開く。	外面、口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	内面 7.5YR5/6 明褐 外面 5YR5/6 明赤カツ	石英・チャート・白色粒少量。	良好	4と同一個体。
4号住	4	土師器	甕	163-SI04 一括・SK32一括	―	[10.0]	(10.8)	胴部は直線的に開く。	外面、胴部ヘラケズリ。内面、胴部ヘラナデ。	内面 5YR6/6 橙 外面 5YR5/6 明褐	石英・チャート・白色粒少量。	良好	3と同一個体。
4号住	5	礫	支脚	163-SI04 カマド内	長さ15.5　幅10.9　厚さ5.3　重さ1299.3g　石材：片麻岩　被熱痕あり。								

５号住居跡　（第 16・17 図、写真図版６・９）

調査区の南に位置し、北西の１号住居跡と 16 m、北の４号住居跡と 18 mの距離をもつ。性格不明遺構と重複し本跡が新しい。黄褐色土層を基盤として構築され、平面形態はやや歪んでいるが主軸方向の長い長方形である。規模は長軸が東西軸で 4.83 m、南北軸 3.35 m、確認面からの深さは 12 cmを測る。主軸方向はＮ－116°－Ｅを示す。壁は掘り込みが浅いため判然としないがほぼ垂直に立ち上がり、床面は直床でほぼ平坦である。硬化面は認められず、壁溝及びピットは確認されていない。カマドは東壁の中央に屋外へかけて構築され、主軸は住居跡と同一方向を示す。規模は全長 95 cm、最大幅 48 cmである。煙道は長く突出するものの燃焼部との境は明瞭ではなく、火床面も認められない。天井部と袖は残存せず、前面の床下から平面円形の浅い掘り込みが認められている。規模は 53 × 50 cm、深さ 26 cmである。カマド内の堆積土は住居跡内と同様であり、構材は確認されない。なお、住居跡内の覆土はにぶい黄色粘質土を含んだ黒褐色粘質土の単層である。遺物は収納箱約１/10 箱分が出土している。出土状態はカマド周辺にまとまりをみせる。図示した遺物は、土師器の埦・耳皿、須恵器の瓶類・甕、石製品の砥石、用途不明の鉄製品である。遺物図版番号１・３は住居跡東壁際、２は南壁際、４は東壁際、５は北壁際、６は中央北よりの出土であった。時期については、出土遺物の形態から９世紀後葉の年代が与えられる。



第 16 図　５号住居跡・出土遺物 (1)



第17図　5号住居跡出土遺物 (2)

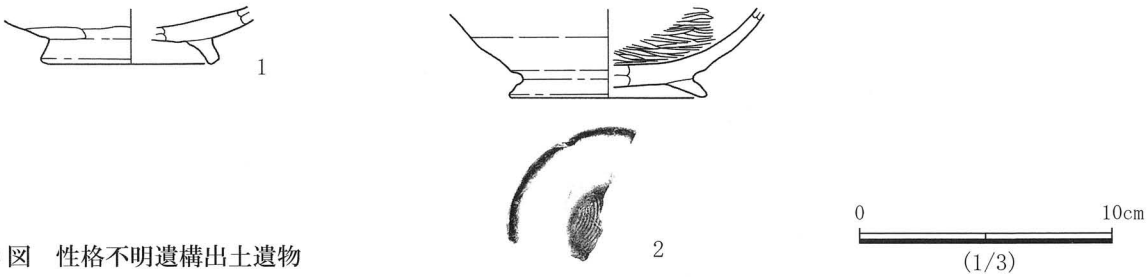
第5表　5号住居跡　出土遺物観察表

遺構	No.	種類	器種	注記	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
5号住	1	土師器	耳皿	163-SI05 No.05	(5.8) 9.5	3.7	4.9	長軸方向口縁部は、ほぼ水平方向に開き、短軸方向口縁部は、両側を押し込んで立ち上がらせる。高台貼付。	外面、口縁部～体部ミガキ、高台部ナデ。内面、口縁部～底部ミガキ、高台部ナデ。	内面 N3/ 灰 外面 10Y2/1 黒	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	内外面全体を黒色処理。
5号住	2	ロクロ土師器	埦	163-SI05 No.01	(15.0)	[4.9]	—	体部は丸みを持ち、口縁部は短く外反。	ロクロ成形。外面、体部下端手持ちヘラケズリ、内面、口縁部～底部ミガキ。	内面 5Y2/1 黒 外面 7.5YR4/3 褐	雲母・細砂粒少量	良好	内面黒色処理。
5号住	3	須恵器	瓶	163-SI05 No.04	—	[6.7]	—	口頸部は外反して開く。	ロクロ成・整形。	内面 5Y7/2 灰白 外面 5Y7/1 灰白	白色粒・黒色粒微量。	還元良好	内面と外面一部に自然釉。
5号住	4	須恵器	甕	163-SI05 K	—	—	—	やや丸みを持つ肩部。	外面、平行タタキ。内面、無文の当具痕。	内面 N4/ 灰 外面 2.5YR4/1 赤灰	石英・チャート少量、白色針状粒微量。	還元良好	外面に灰かぶり。
5号住	5	石製品	砥石	163-SI05 No.03	長さ[10.0]　幅4.4　厚さ3.4　重量136.52g　石材:流紋岩　4面使用。上端部欠損。								
5号住	6	鉄製品	不明	163-SI05 No.02	長さ9.7　幅2.0　厚さ1.3　重量33.84g　錆膨れ著しく詳細不明。								

第2節　性格不明遺構

性格不明遺構　(第18・19図、写真図版7・10)

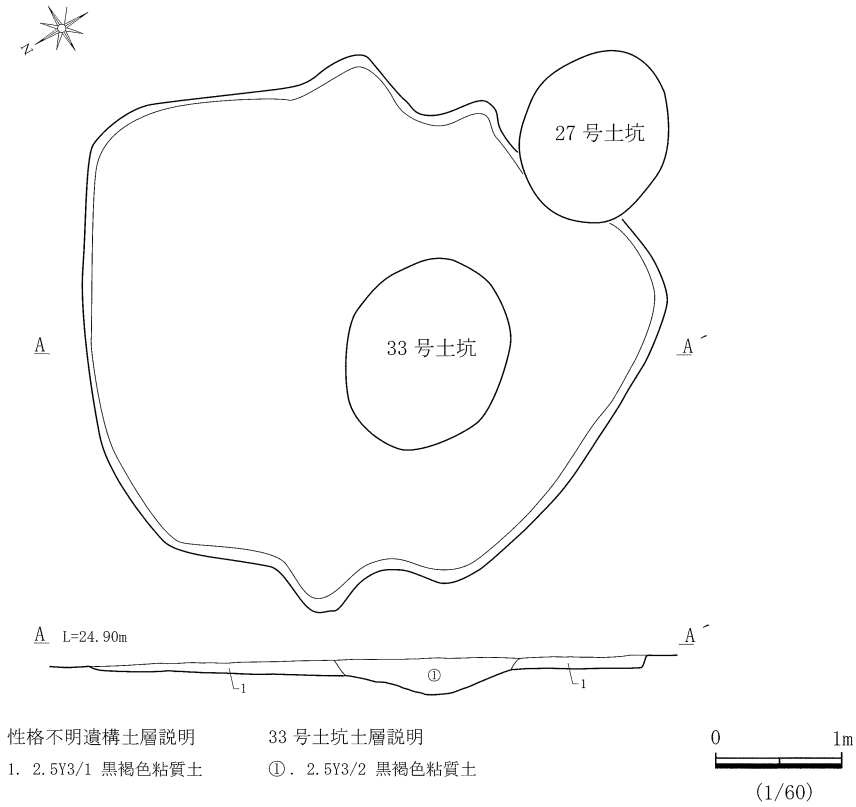
調査区の南部に位置し、北西の1号住居跡と20 m、北の4号住居跡と14 mの距離をもつ。1号住居跡・27・33号土坑と重複し本跡が古く、遺構の南部分と中央部を壊されている。黄褐色土層を基盤として構築され、平面形態は凹凸が認められるが全体としては方形を意識していたとみられる。住居の構築を意図したものか。規模は長軸が南北軸で4.44 m、東西軸3.64 m、確認面からの深さは4～11 cmを測る。長軸方向はN -30°- Eを示す。壁は掘り込みが浅いため判然としないがほぼ垂直に立ち上がり、底面は直床で、ほぼ平坦である。硬化面は認められず、施設は確認されていない。覆土はにぶい黄色粘質土を含んだ黒褐色粘質土の単層である。遺物は収納箱約1/10箱分が出土している。出土遺物は全体に少なく、土師器の埦を図示した。時期については、出土遺物の形態から9世紀後葉頃の年代が与えられる。



第18図　性格不明遺構出土遺物

第６表　性格不明遺構　出土遺物観察表

遺構	No.	種類	器種	注記	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
性格不明遺構	1	ロクロ土師器	埦	163-SX01 一括	—	[2.3]	(7.1)	高台は外側に開く。	ロクロ整形。外面、体部下端手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り後、高台貼付。	内面 7.5YR6/6 橙 外面 5YR6/6 橙	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	
性格不明遺構	2	ロクロ土師器	埦	163-SX01 一括	—	[3.5]	(7.8)	体部は丸みを持つ。高台は外側に開く。	ロクロ整形。外面、底部回転糸切り後、高台貼付。内面、体部ミガキ。	内面 10YR4/1 褐灰 外面 10YR6/4 にぶい黄橙	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	内面黒色処理。



第 19 図　性格不明遺構

第３節　土坑

１号土坑　（第 22 図、写真図版７）

調査区の北部に位置する。平面形態は楕円形で、規模は東西軸 1.20 m、南北軸 1.42 m、深さ 0.44 m以上を測る。長軸方向はＮ -40°－Ｅを示す。湧水が激しく安全上完掘はできなかったが、上部がやや開き井戸跡とみられる。覆土は黒褐色粘質土と暗灰黄褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

２号土坑　（第 22 図、写真図版７）

調査区の北部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸 0.84 m、南北軸 0.78 m、深さ 0.42 m以上を測る。長軸方向はＮ -55°－Ｗを示す。湧水が激しく安全上完掘はできなかったが、上部がやや開き井戸跡とみられる。覆土は黒褐色粘質土とオリーブ褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

３号土坑　（第 22 図、写真図版７）

調査区の東部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸 0.90 m、南北軸 1.00 m、深さ 0.14 mを測る。長軸方向はＮ -31°－Ｗを示す。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は暗灰黄褐色粘質土とオリーブ

褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

4号土坑　（第22図、写真図版7）

調査区の北部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸1.04 m、南北軸1.08 m、深さ0.24 mを測る。長軸方向はN -41°- Wを示す。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土とオリーブ褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

5号土坑　（第22図、写真図版7）

調査区の北部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸1.18 m、南北軸1.24 m、深さ0.20 mを測る。長軸方向はN -40°- Wを示す。底面は平坦であるものの壁際がやや高くなり垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

6号土坑　（第20・22図、写真図版7・9）

調査区の北部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸0.98 m、南北軸1.12 m、深さ0.52 mを測る。長軸方向はN -34°- Eを示す。底面は平坦で、壁は下端に丸味をもって垂直に立ち上がり上端がやや開く。覆土は黒褐色粘質土である。遺物は須恵器の甕が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から奈良・平安時代の所産とみられる。

7号土坑　（第20・22図、写真図版7・9）

調査区の南部に位置する。平面形態は長楕円形で、規模は東西軸2.15 m、南北軸0.76 m、深さ0.12 mを測る。長軸方向はN -85°- Wを示す。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は土師器の埦が出土している。時期は出土遺物から9世紀後葉～10世紀前葉頃とみられる。

8号土坑　（第20・22図、写真図版7・9）

調査区の中央部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸0.60 m、南北軸0.56 m、深さ0.18 mを測る。長軸方向はN -82°- Eを示す。底面は平坦で、壁は下端に丸味をもって緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土とオリーブ褐色粘質土である。遺物は須恵器の甕が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から奈良・平安時代の所産とみられる。

9号土坑　（第20図、写真図版7・9）

調査区の中央部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸0.92 m、南北軸0.92 m、深さ0.18 mを測る。長軸方向はN - 0°を示す。底面は平坦で、壁は下端に丸味をもって緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土とオリーブ褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

10号土坑　（第20・22図、写真図版7・9）

調査区の中央部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸0.88 m、南北軸1.00 m、深さ0.25 mを

測る。長軸方向はＮ-40°－Ｅを示す。底面は平坦で、壁は下端に丸味をもって垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は土師器の埦が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から９世紀後葉～10世紀前葉の所産とみられる。

11号土坑　（第22図、写真図版７）

調査区の中央部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸0.97ｍ、南北軸1.02ｍ、深さ0.56ｍを測る。長軸方向はＮ-32°－Ｗを示す。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

12号土坑　（第22図、写真図版７）

調査区の中央部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸0.80ｍ、南北軸0.84ｍ、深さ0.16ｍを測る。長軸方向はＮ-38°－Ｅを示す。底面は平坦で、壁は下端に丸味をもって緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

13号土坑　（第22図、写真図版７）

調査区の北部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸1.20ｍ、南北軸1.30ｍ、深さ0.40ｍを測る。長軸方向はＮ-36°－Ｗを示す。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

14号土坑　（第20・22図、写真図版７・９）

調査区の南部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸0.83ｍ、南北軸0.98ｍ、最深部の深さ0.17ｍを測る。長軸方向はＮ-40°－Ｗを示す。底面は平坦であるものの南側がやや窪む。壁は下端に丸味をもって緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は平瓦片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から奈良・平安時代の所産とみられる。

15号土坑　（第20・22図、写真図版７・９）

調査区の中央部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸1.50ｍ、南北軸1.60ｍ、深さ0.30ｍを測る。長軸方向はＮ-41°－Ｅを示す。底面は平坦で、壁は下端に丸味をもって垂直に立ち上がり上端がやや開く。覆土は黒褐色粘質土である。遺物は土師器の埦が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から９世紀後葉頃の所産とみられる。

16号土坑　（第22図、写真図版７）

調査区の中央部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸1.24ｍ、南北軸1.24ｍ、最深部の深さ0.24ｍを測る。長軸方向はＮ－０°を示す。底面は平坦であるものの南へ向けて僅かに傾斜する。壁は下端に丸味をもって緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

17号土坑　（第22図、写真図版７）

調査区の南部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸1.10ｍ、南北軸1.05ｍ、深さ0.45ｍを測る。長軸方向はＮ-50°－Ｅを示す。底面は凹凸があり、壁は下端が角張り垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土と灰黄褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

18号土坑　（第22図、写真図版７）

調査区の南部に位置する。平面形態は楕円形で、規模は東西軸0.98ｍ、南北軸1.36ｍ、最深部の深さ0.24ｍを測る。長軸方向はＮ-30°－Ｅを示す。底面は中央部が最も深く、壁は丸味をもって緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土とオリーブ褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

19号土坑　（第22図、写真図版７）

調査区の南部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸0.62ｍ、南北軸0.62ｍ、深さ0.11ｍを測る。長軸方向はＮ－０°を示す。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土とオリーブ褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は出土遺物から平安時代の所産とみられる。

20号土坑　（第20・22図、写真図版７・９）

調査区の南部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸1.36ｍ、南北軸1.34ｍ、最深部の深さ0.60ｍを測る。長軸方向はＮ-80°－Ｅを示す。底面は中央部が最も深く、壁は丸味をもって緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土と暗灰黄褐色粘質土である。遺物は土師器の埦が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から10世紀代の所産とみられる。

21号土坑　（第22図、写真図版７）

調査区の南部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸0.54ｍ、南北軸0.56ｍ、深さ0.11ｍを測る。長軸方向はＮ-40°－Ｗを示す。底面は中央がやや高くなり、壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

22号土坑　（第22図、写真図版７）

調査区の南部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸0.60ｍ、南北軸0.50ｍ、深さ0.10ｍを測る。長軸方向はＮ-70°－Ｗを示す。底面は多少の凹凸があり、壁は丸味をもって緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

23号土坑　（第22図、写真図版７）

調査区の南部に位置する。平面形態は楕円形で、規模は東西軸1.26ｍ、南北軸1.54ｍ、最深部の深さ0.22ｍを測る。長軸方向はＮ-40°－Ｅを示す。底面は中央部が最も深く、壁は丸味をもって緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土と暗灰黄褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

24号土坑　（第21・22図、写真図版7・9）

調査区の中央部に位置する。平面形態はいわゆる瓢箪形で2基の土坑が重複した様相である。規模は東西軸1.24 m、南北軸2.02 m、深さ0.40 mを測る。長軸方向はN -42°-Wを示す。底面は東側が高くなり、壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土とオリーブ褐色粘質土である。遺物は土師器の埦が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

25号土坑　（第22図、写真図版7）

調査区の南部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸1.32 m、南北軸1.36 m、深さ0.35 mを測る。長軸方向はN -40°-Wを示す。底面は平坦で、北東部の壁際に小ピットを伴う。壁は垂直に立ち上がり上部で開く。覆土は黒褐色粘質土と暗灰黄褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

26号土坑　（第22図、写真図版7）

調査区の南部に位置する。平面形態は円形を基調とし、北側に楕円形の浅い掘り込みを伴う。規模は東西軸1.80 m、南北軸1.90 m、深さ0.50 mを測り、長軸方向はN -40°-Eを示す。北側の掘り込みの長軸は2.40 m、短軸1.08m、深さ0.10mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土とオリーブ褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

27号土坑　（第21・22図、写真図版7・9）

調査区の南部に位置する。性格不明遺構と重複し本跡が新しい構築である。平面形態は円形で、規模は東西軸1.36 m、南北軸1.42 m、深さ0.24 mを測る。長軸方向はN -30°-Wを示す。底面は多少の凹凸があり、壁は丸味をもって緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は土師器の坏と埦が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から10世紀後葉の所産とみられる。

28号土坑　（第22図、写真図版7）

調査区の南部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸1.08 m、南北軸1.12 m、深さ0.30 mを測る。長軸方向はN -28°-Wを示す。底面は平坦で、壁は丸味をもって緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

29号土坑　（第22図、写真図版7）

調査区の南部に位置する。平面形態は楕円形で、規模は東西軸1.68 m、南北軸1.06 m、深さ0.16 mを測る。長軸方向はN -73°-Wを示す。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

30号土坑　（第22図、写真図版7）

調査区の南部に位置する。平面形態は円形と推測され1/2ほどが調査区外となる。規模は東西軸1.19ｍ、南北軸0.80ｍ以上、調査区際の土層断面にみる深さは0.30ｍを測る。長軸方向は不明である。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土と灰黄褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

31号土坑　（第22図、写真図版7）

調査区の西部に位置する。1号住居跡と重複し本跡が新しい構築である。平面形態は楕円形で、規模は東西軸1.35ｍ、南北軸1.54ｍ、深さ0.67ｍを測り、長軸方向はＮ-34°-Ｅを示す。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土とオリーブ褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

32号土坑　（第15・22図、写真図版7）

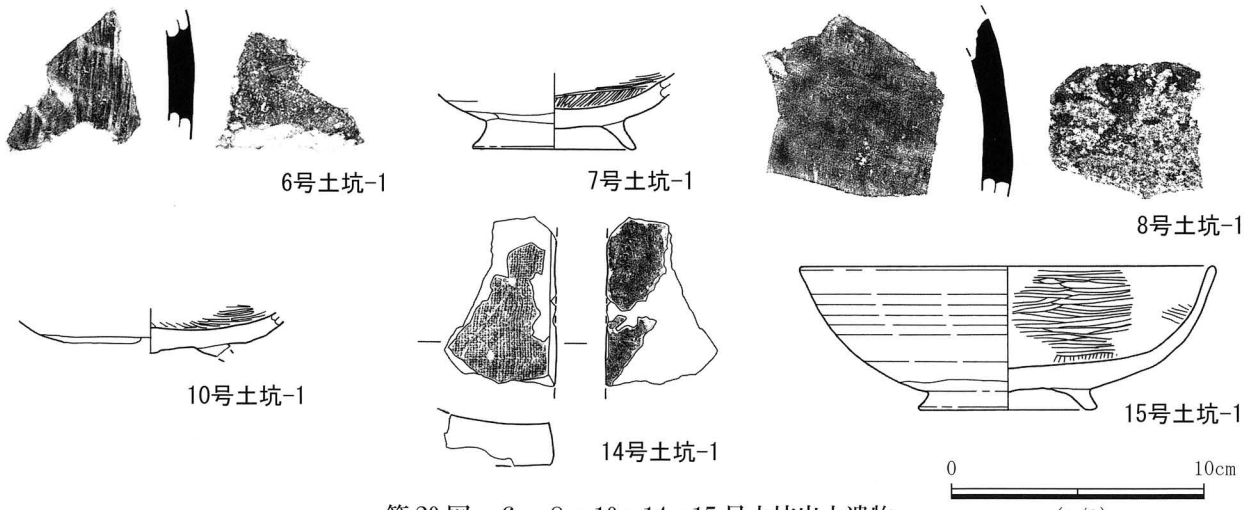
調査区の東部に位置する。4号住居跡と重複し本跡が新しい構築である。平面形態は円形で、規模は東西軸1.68ｍ、南北軸1.65ｍ、深さ0.36ｍを測り、長軸方向はＮ-34°-Ｅを示す。底面は平坦で、壁は下端に丸味をもって垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土と暗灰黄褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

33号土坑　（第22図、写真図版7）

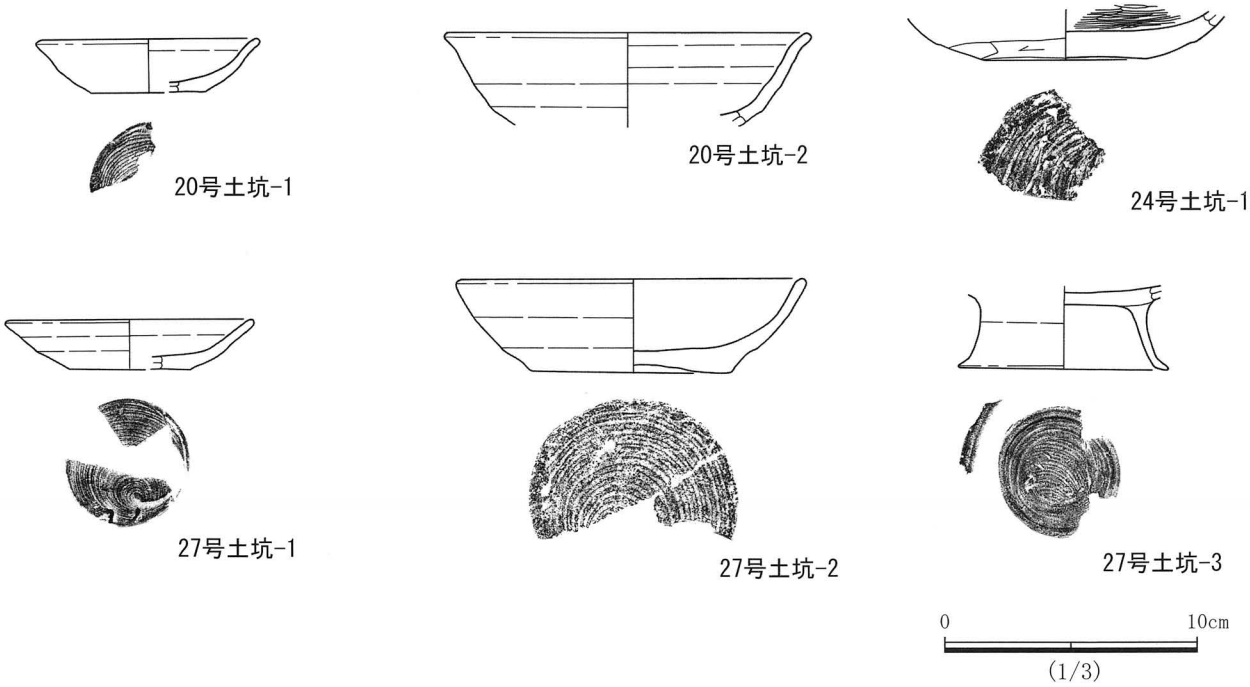
調査区の南部に位置する。性格不明遺構と重複し本跡が新しい構築である。平面形態は楕円形で、規模は東西軸1.26ｍ、南北軸1.54ｍ、深さ0.30ｍを測り、長軸方向はＮ-34°-Ｗを示す。底面は平坦で、壁は南側が垂直に立ち上がるほかは緩やかである。覆土は黒褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

34号土坑　（第22図、写真図版7）

調査区の北部に位置する。平面形態は楕円形で、規模は東西軸1.46ｍ、南北軸1.98ｍ、深さ0.58ｍを測り、長軸方向はＮ-30°-Ｅを示す。底面は平坦で、壁は南側が緩やかに立ち上がるほかは垂直である。覆土はローム ブロックを多く含む黒褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。



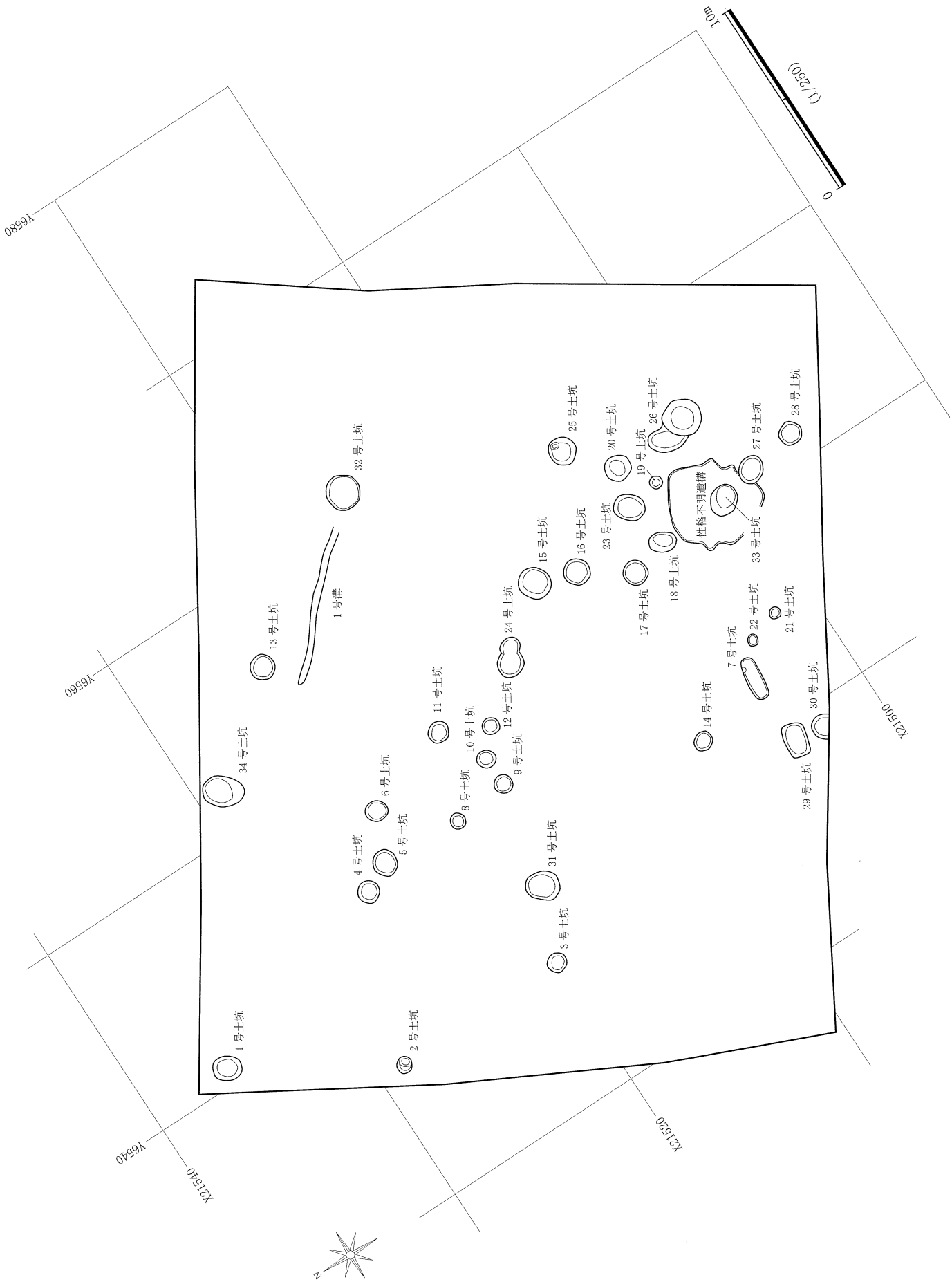
第20図　6～8・10・14・15号土坑出土遺物　(1/3)



第21図　20・24・27号土坑出土遺物

第7表　土坑　出土遺物観察表

遺構	No.	種類	器種	注記	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
6号土坑	1	須恵器	甕	163-SK06	—	—	—	胴部片。	外面、平行タタキ。内面、ナデ。	内面 10YR4/1 褐灰 外面 N5/ 灰	石英・チャート・白色粒・黒色粒微量。	還元良好	
7号土坑	1	ロクロ土師器	埦	163-SK07	—	[3.0]	(6.5)	体部は丸みを持つ。高台は外側に開く。	ロクロ成形。外面、体部下端手持ちヘラケズリ、内面、体部～底部ミガキ。	内面 5YR4/1 褐灰 外面 2.5YR6/8 橙	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	内面黒色処理。
8号土坑	1	須恵器	甕	163-SK08	—	—	—	胴部片。	外面、平行タタキ後ナデ。内面、摩滅。	内面 N5/ 灰 外面 5Y6/1 灰	石英・白色粒・黒色粒少量。	還元良好	
10号土坑	1	ロクロ土師器	埦	163-SK10	—	(1.6)	—	高台欠損。	ロクロ成形。外面、体部下端手持ちヘラケズリ、内面、体部～底部ミガキ。	内面 N1.5/ 黒 外面 7.5YR7/4 にぶい橙	雲母・石英・チャート・黒色粒少量。	良好	内面黒色処理。
14号土坑	1	瓦	平瓦	163-SK14	—	—	—		凹面、布目痕。凸面、ヘラケズリ後ナデ。	凹面 2.5Y4/2 暗灰黄 凸面 5Y7/1 灰白	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	還元普通	厚さ1.6cm
15号土坑	1	ロクロ土師器	埦	163-SK15	(16.5)	5.7	7.0	体部は丸みを持つ。高台は外側に開く。	ロクロ成形。外面、体部下端手持ちヘラケズリ、内面、口縁部～底部ミガキ。	内面 5YR5/6 明赤褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	内面不完全な黒色処理。
20号土坑	1	ロクロ土師器	小型坏	163-SK20	(8.8)	2.1	(4.6)	体部は丸みを持ち、口縁部は外反する。	ロクロ成形。外面、底部回転糸切り無調整。	内面 2.5YR5/6 明赤褐 外面 5YR6/6 橙	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	
20号土坑	2	ロクロ土師器	埦	163-SK20	(14.5)	[3.6]	—	口縁部はやや外反する。	ロクロ成形。内面、口縁～体部にミガキあり。	内面 5YR6/6 橙 外面 7.5YR7/6 橙	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	
24号土坑	1	ロクロ土師器	坏	163-SK24	—	[1.8]	(6.2)	体部は丸みを持って立ち上がる。	ロクロ成形。外面、体部下端手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り無調整。内面、体部～底部ミガキ。	内面 7.5YR4/2 灰褐 外面 7.5YR6/6 橙	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	
27号土坑	1	ロクロ土師器	小型坏	163-SK27	9.9	2.0	4.9	口縁部はわずかに外反する。	ロクロ成形。外面、底部回転糸切り無調整。	内外面 7.5YR7/6 橙	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	
27号土坑	2	ロクロ土師器	坏	163-SK27	(13.9)	3.7	(7.9)	体部は丸みを持つ。	ロクロ成形。外面、底部回転糸切り無調整。	内面 10YR4/2 灰黄褐 外面 10YR6/6 明黄褐	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	
27号土坑	3	ロクロ土師器	埦	163-SK27	—	[3.3]	(8.3)	高台は高く、裾部は外反する。	ロクロ成形。外面、底部回転糸切り後高台貼付。	内面 7.5YR5/4 にぶい褐 外面 7.5YR4/2 灰褐	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	



第 22 図　性格不明遺構、1 ～ 34 号土坑、1 号溝

第４節　溝状遺構

１号溝　（第 22 図、写真図版７）

調査区の北部に位置する。４号住居跡と重複し本溝が新しく、住居跡の壁の一部を壊している。規模は長さ 7.96m、幅 0.30 ～ 0.38m、深さ 0.13m を測り、主軸方向はＮ -45°－Ｗを示す。底面は凹凸があり、断面形状は概ね逆台形を呈する。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は出土していない。時期は不明である。

第５節　遺構外出土遺物

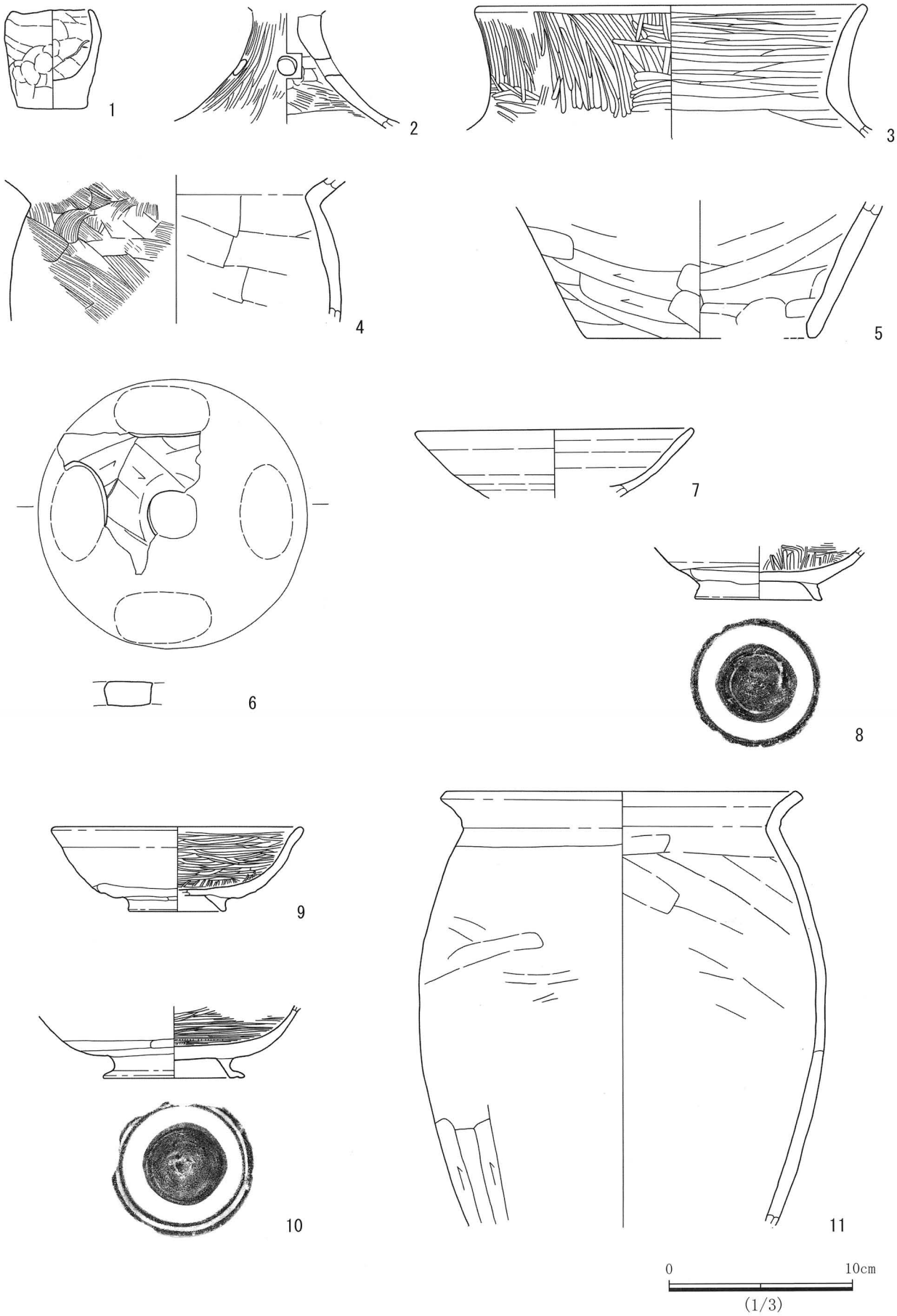
遺物は収納箱約 1/4 箱分が出土している。その中から 11 点を掲載した。

１は手捏土器で古墳時代前期、２は土師器の器台で４世紀後葉～５世紀前葉、３は土師器甕の口縁部で４世紀後葉～５世紀前葉、４は土師器甕の口縁部～胴部で４世紀後葉～５世紀前葉の所産とみられ、１～４は古墳時代前期の遺物と考えられる。５は土師器甑の胴部、６は土師器甑の底部片で、５・６は古墳時代後期～奈良・平安時代の所産であると思われる。７は土師器ロクロ成形の坏で９世紀代の所産と考えられる。８は土師器ロクロ成形の高台付埦で９世紀後半、９は土師器ロクロ成形の高台付埦で９世紀後葉～ 10 世紀前葉、10 は土師器ロクロ成形の高台付埦で 10 世紀後半、11 は底部を欠損している土師器の甕で９世紀後葉～ 10 世紀前葉の所産とみられ、７～ 11 は平安時代の遺物と考えられる。

（齋藤　洋・小川将之）

第８表　遺構外　出土遺物観察表

遺構	No.	種類	器種	注記	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
遺構外	1	土師器	手捏土器	163一括	4.4	5.4	3.8	口縁部は内彎する。	外面、口縁部～体部ナデ・指頭圧痕、底部ナデ。内面、口縁部～底部指ナデ。	内面　10YR6/4 にぶい黄橙 外面　2.5Y7/3 浅黄	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	
遺構外	2	土師器	器台	163一括	－	[6.1]	－	脚部に4孔。裾部は大きく開く。	外面、脚部ミガキ。内面、脚部上位ナデ、下位ハケ目、裾部ナデ。	内面　10YR8/4 浅黄橙 外面　2.5Y7/2 灰黄	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	
遺構外	3	土師器	甕	163一括	21.4	[7.2]	－	口縁部はやや外反して開く。	外面、口縁部ミガキ。内面、口縁部粗いミガキ。	内外面　10YR6/4 にぶい黄橙	石英・チャート・白色粒・黒色粒微量。	良好	
遺構外	4	土師器	甕	163表土一括	－	[7.8]	－	口縁部に向かって「く」の字状に開く。	外面、口縁部～胴部ハケ目。内面、胴部ヘラナデ。	内面　10YR4/1 褐灰 外面　10YR3/2 黒褐	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	
遺構外	5	土師器	甑	163一括	－	[7.1]	(12.6)	底部欠損するが多孔式の甑。胴部は直線的に開く。	外面、胴部ヘラケズリ。内面、胴部ヘラナデ。	内面　7.5YR4/2 灰褐 外面　7.5YR6/4 にぶい橙	雲母・石英・長石・赤褐色粒少量。	良好	
遺構外	6	土師器	甑	163一括	－	－	－	底部片。中央部円形孔の対角線上に楕円形孔4か所と想定される。	外面、底部ヘラケズリ、孔周囲ナデ。内面、底部ナデ。	内外面　10YR7/3 にぶい黄橙	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	
遺構外	7	ロクロ土師器	坏	163一括	(15.2)	[3.6]	－	体部はわずかに丸みを持つ。	ロクロ成形。	内外面　7.5YR5/6 明褐	石英・白色粒・黒色粒少量	良好	
遺構外	8	ロクロ土師器	埦	163一括	－	[2.8]	6.9	高台は外方に開く。	ロクロ成形。外面、体部下端手持ちヘラケズリ。内面、体部～底部ミガキ。	内面　10YR4/1 褐灰 外面　10YR4/2 灰黄褐	雲母・石英・チャート・黒色粒少量。	良好	内面不完全な黒色処理。
遺構外 試掘	9	ロクロ土師器	埦	川西下水5T内	(13.8)	4.6	5.4	体部は丸みを持ち、口不恥部はわずかに外反する。断面三角形の高台。	ロクロ成形。外面、体部下端手持ちヘラケズリ。内面、口縁部～底部ミガキ。	内面　5Y3/1 オリーブ黒 外面　10YR4/2 灰黄褐	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	内面黒色処理。
遺構外	10	ロクロ土師器	埦	163一括	－	[3.4]	7.6	体部は丸みを持つ。高台裾部は外方に折れる。	ロクロ成形。外面、体部下端手持ちヘラケズリ。内面、体部～底部ミガキ。	内面　7.5YR5/4 にぶい褐 外面　7.5YR5/6 明褐	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	内面不完全な黒色処理。
遺構外	11	土師器	甕	163一括	(19.8)	[23.5]	－	口縁部は外反して開く。口唇部面取り。	外面、口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後、上～中位ナデ。内面、口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	内外面　7.5YR6/6 橙	石英・チャート・白色粒・黒色粒少量。	良好	外面に煤付着・



第23図　遺構外出土遺物

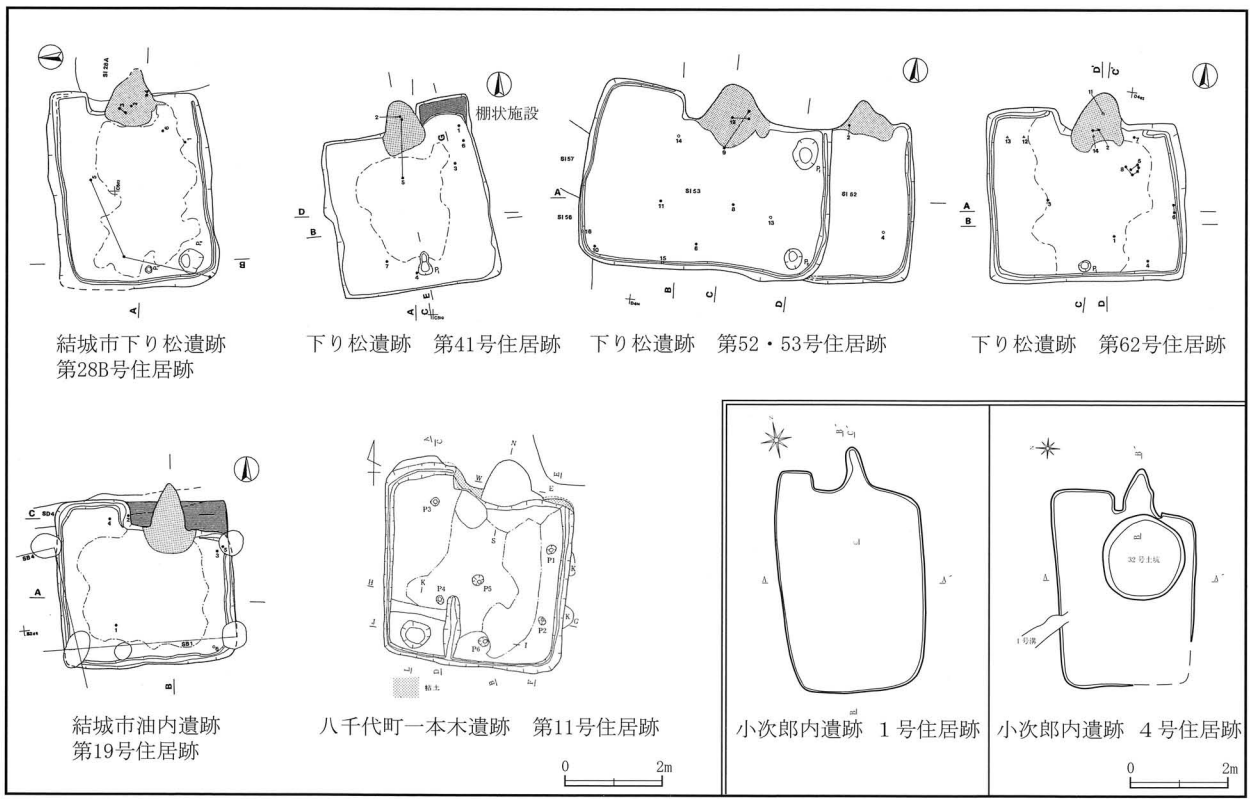
第5章　総　括

小次郎内遺跡は、鬼怒川の旧河道（現飯沼川）を眼下に臨む台地上に立地し、平成13年刊行の『茨城県遺跡地図』では奈良・平安時代、中・近世の集落跡とされ、その範囲は約23,000㎡に及んでいる。調査は、周知されている遺跡の南部に実施されたもので、面積が1,320㎡とまとまったことが幸いして、平安時代に営まれた集落の一端が明らかとなった。

検出された遺構は、竪穴住居跡5軒、土坑34基、性格不明遺構1基、時期・用途不明の溝状遺構1条である。遺物は、平安時代の土器類を中心に、少量ではあるが古墳時代中・後期の資料を得ている。古墳時代の遺構は検出されておらず、積極的に集落の展開を予測するまでは至っていないが、周辺部における埋蔵は十分にうかがわれる。

集落が営まれた時期については、出土遺物の型式学的編年を援用すると、須恵器の比率が低く土師器が大多数を占める様相や、埦における高台の足高化、耳皿や皿状の坏が確認されること。甕の口縁部は短く「く」の字状に外反し、端部が面をなすなどの土器様式から、平安時代のなかでも9世紀後葉～11世紀前葉の年代が与えられる。各住居跡個別の時期は、5号住居跡が9世紀後葉、1・3号住居跡が9世紀後葉～10世紀前葉、2号住居跡が10世紀前葉、4号住居跡が10世紀後葉である。

本調査における成果として特筆される点は住居跡の構造にある。この時期の常陸国では、竪穴の平面が正方形あるいはカマドに対して主軸方向が短い横長傾向にあるものの、本遺跡では縦長化がうかがわれ、カマドの左側が平面方形に張り出して掘り込まれる特徴をもつ。調査された5軒の竪穴住居跡のうち、平面正方形の2号住居跡を除くといずれも縦長で、さらに、2・5号住居跡を除く3軒はカマドの左側にはこの張り出しを伴っていた。2号住居跡は張り出しを伴っていないが、カマドの左側には貯蔵穴が付設されている。住居跡構造の変遷を追うと、張り出しを伴わない形態から張り出しの付設へと変化するようである。



第24図　本遺跡と周辺遺跡より検出の住居跡

八千代町内にて調査報告がなされている「一本木遺跡」より検出の第11号住居跡と第17号住居跡でも、カマドを正面に見た左側に平面方形に張り出す掘り込みが確認されている。これら2軒の遺構は報告書中の分類ではⅣαに含まれているもので、帰属年代は9世紀代平安に属するものである。いずれの遺構も平面形状はやや歪ながら正方形を呈し、規模は第11号住居跡が東西軸3.58m、南北軸3.50mで面積が12.2㎡、第17号住居跡が東西軸3.50m、南北軸3.60mで面積が12.6㎡とほぼ同一の形状と規模を呈している。今回の報告では遺存状況の良好な第11号住居跡を比較資料として第24図に図示した。また、結城市の下り松・油内遺跡では、奈良・平安時代に帰属する163軒の住居跡のうち、5軒においてカマドの横に張り出しが確認できる。住居跡の平面形態は正方形を基調とし、縦長の長方形は1軒となるが顕著ではない。横長の長方形は1軒である。張り出しの付設位置についても、カマドの対面左側に偏在しており本遺跡と同じ傾向にある。時期については、9世紀後葉2軒、末1軒、10世紀前半2軒であり、縦長の住居跡は10世紀前半に比定される。さらに、下り松・油内遺跡での特徴的な住居跡構造として、カマドの脇に検出された棚状施設がある。棚状施設は住居跡竪穴の外側に隣接して営まれた平面方形の浅い掘り込みで、張り出しのように住居跡の床面には達しておらず、全てカマド右側に位置している。この形態の住居跡は4軒が検出され、帰属年代は9世紀中葉2軒と後葉1軒、9世紀末～10世紀初頭1軒であった。第24図に示したが、油内遺跡では、9世紀後葉に位置付けられる第19号住居跡より張り出しと棚状施設が共に検出されている。本遺跡で棚状施設は認められていないが、油内遺跡第19号住居跡のように両者が共に検出され、位置に規則性がうかがわれることは、有機的な関係を物語るものであろう。時期的には棚状施設が先行して構築され、張り出しを伴うように変化した可能性がある。また、棚状施設は掘り込みが浅いため、上部が削平等により失われ検出されなかったとの考え方もできる。小次郎内遺跡の場合は各住居の掘り込み深度が浅くその可能性は高いといえよう。また、縦長の平面形態は、住居の建物構造に起因すると理解され、僅かな事例での結論付けはできないが、平面正方形が一般的であるなかで縦長傾向と張り出しが認められることは、同一の機能あるいは習俗を共有する集団の存在を示唆している。

遺跡が主に営まれた9世紀後半～10世紀は、全国的に律令制度が弛緩する時期にあって、各地に私営田領主が現れ地方の自立性が強まっていく。本遺跡周辺の川村・宮東遺跡は奈良・平安時代の集落跡を中心にするとみられ、さらに飯沼川の下流には「領主製鉄」と目されている9世紀第2・第3四半期内に操業した、尾崎前山製鉄遺跡が位置している。今回の調査は遺跡全域に実施されていないため断定はできないものの、少なくとも調査区においては9世紀後葉に集落が出現することから、この時期には旧鬼怒川周辺の沼沢地や流域にも開発の手が及んでいたと理解される。もとより集落の直接的な成因を知ることのできる資料は得られていないが、立地条件から眼下に広がる沖積低地に経済基盤を求めることは自然であり、条里水田を主とした律令的な土地制度からの変質という歴史的事実が背景にあると考えられる。

（齋藤　洋）

引用・参考文献

浅井哲也　1992「茨城県内における奈良・平安時代の土器（Ⅰ）」『研究ノート』創刊号　財団法人茨城県教育財団

浅井哲也　1993「茨城県内における奈良・平安時代の土器（Ⅱ）」『研究ノート』2号　財団法人茨城県教育財団

八千代町史編さん委員会　1987『八千代町史（通史編）』八千代町

八千代町教育委員会　1997『一本木遺跡発掘調査報告書』八千代町埋蔵文化財調査報告書第6集

建設省　財団法人茨城県教育財団　1999『一般国道50号結城バイパス改築工事地内埋蔵文化財調査報告書　下り松遺跡　油内遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第145集

茨城県石下土木事務所　財団法人茨城県教育財団　1999『内海道遺跡　一般県道高崎岩井線現道拡幅事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第232集

報告書抄録

ふりがな	こじろううちいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	小次郎内遺跡発掘調査報告書
副書名	農業集落排水事業川西南部地区処理施設建設に伴う遺跡の発掘調査
シリーズ名	八千代町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	12
編集者名	山野井哲夫　齋藤　洋　小川将之
著者名	山野井哲夫　齋藤　洋　小川将之
編集機関	八千代町教育委員会 ／ 〒300-3592 茨城県結城郡八千代町大字菅谷1170 株式会社 地域文化財コンサルタント ／ 〒286-0201 千葉県富里市日吉台1-23-12
発行機関	八千代町 ／ 〒300-3592 茨城県結城郡八千代町大字菅谷1170
発行年月日	2007年(平成19年)9月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
こじろううちいせき 小次郎内遺跡	いばらきけんゆうきぐん 茨城県結城郡 やちよまちおおあざ 八千代町大字 あらいあざはったんだ 新井字八反田 66他	08521	163	36° 11′ 37″	139° 54′ 21″	2006.10.25 ～ 2006.11.24	1,320㎡	農業集落排水事業川西南部地区処理施設建設

所蔵遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
小次郎内遺跡	集落跡	平安時代 時期不明	竪穴住居跡　5軒 性格不明遺構　1基 土坑　34基 溝状遺構　1条	須恵器：瓶・甕・他 土師器：坏・埦・甕・耳皿・他 石製品：有孔円板・砥石 鉄製品：不明 瓦

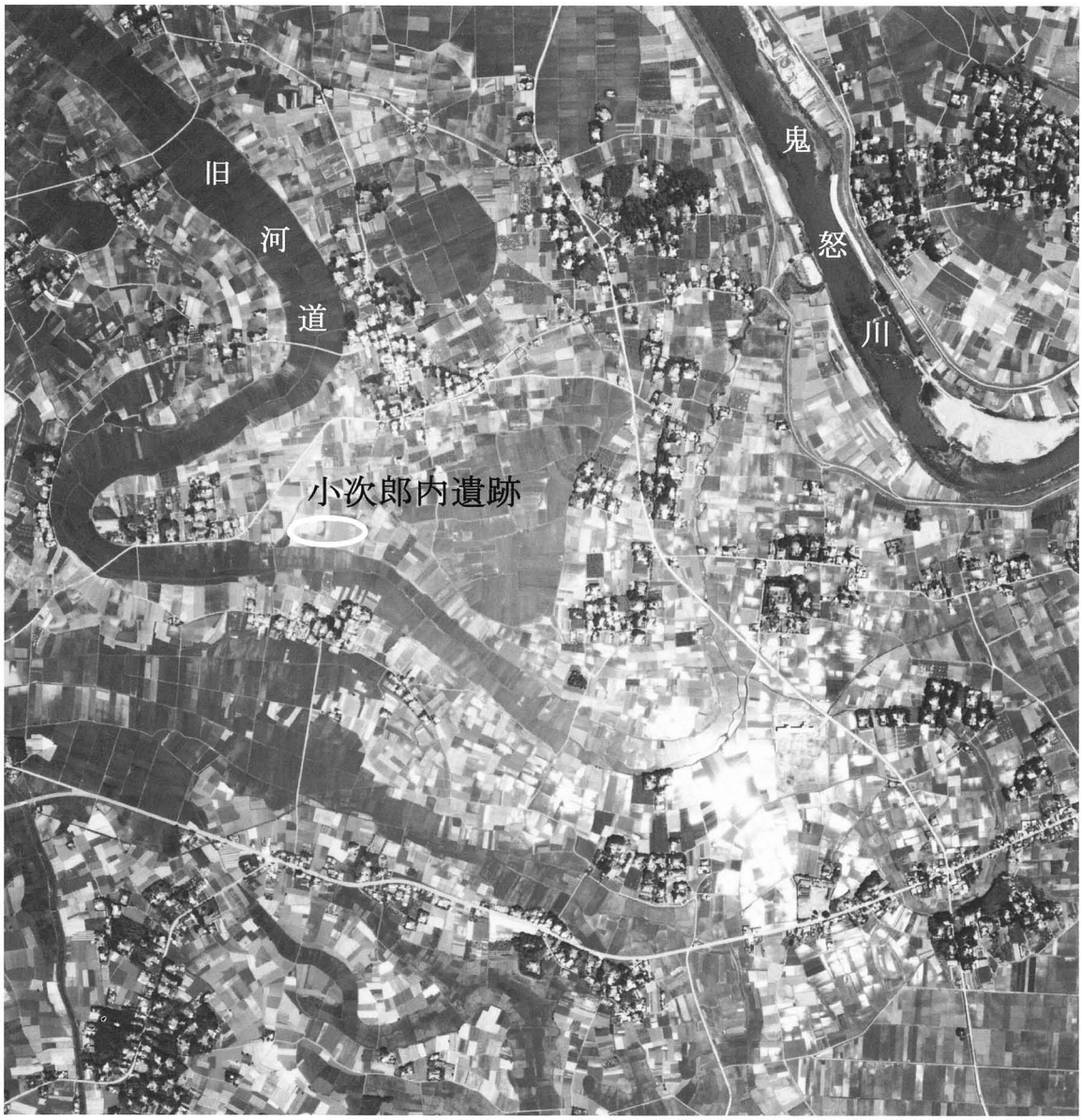
要約（特記事項）

小次郎内遺跡は、鬼怒川の旧河道を眼下に臨む台地上に広がる集落跡で、調査は周知されている範囲の南部において実施された。

この結果主に9世紀後葉～11世紀前葉の平安時代に営まれたことが明らかとなっている。

成果の特筆される点としては、5軒の竪穴住居跡のうち3軒においてカマドの向かって左側が平面方形に張り出して掘り込まれている構造にある。この構造は結城市の下り松・油内遺跡、八千代町一本木遺跡でも確認されており、竪穴住居内おける空間利用を考える上で興味深い事例である。

写 真 図 版



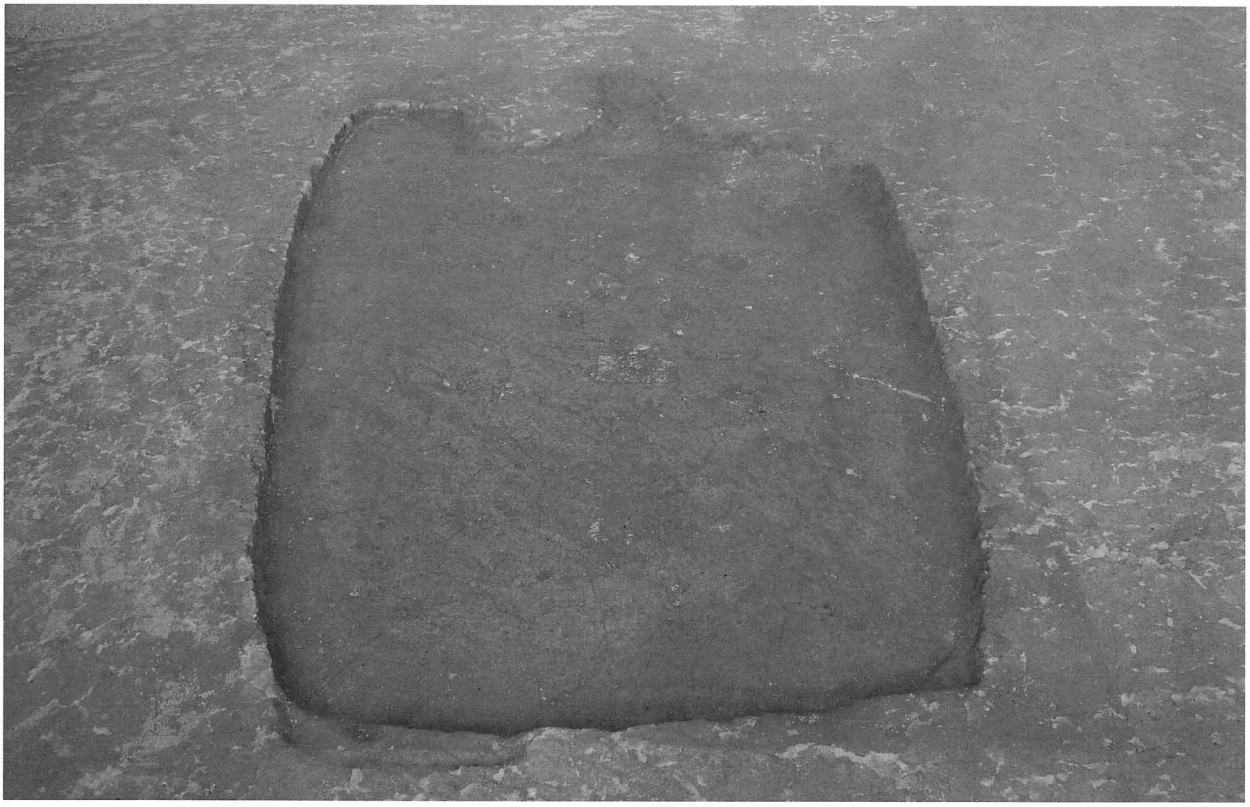
小次郎内遺跡　空中写真

八千代町史（資料編Ⅰ）考古
八千代町史編さん委員会 1988　より

調査区全景１　南から

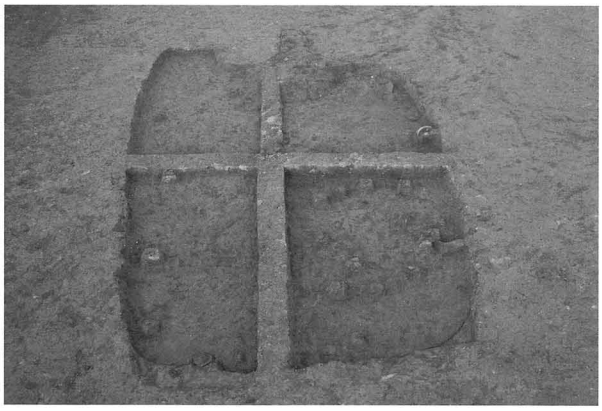
調査区全景２　南から

写真図版　2



1号住居跡全景　南から

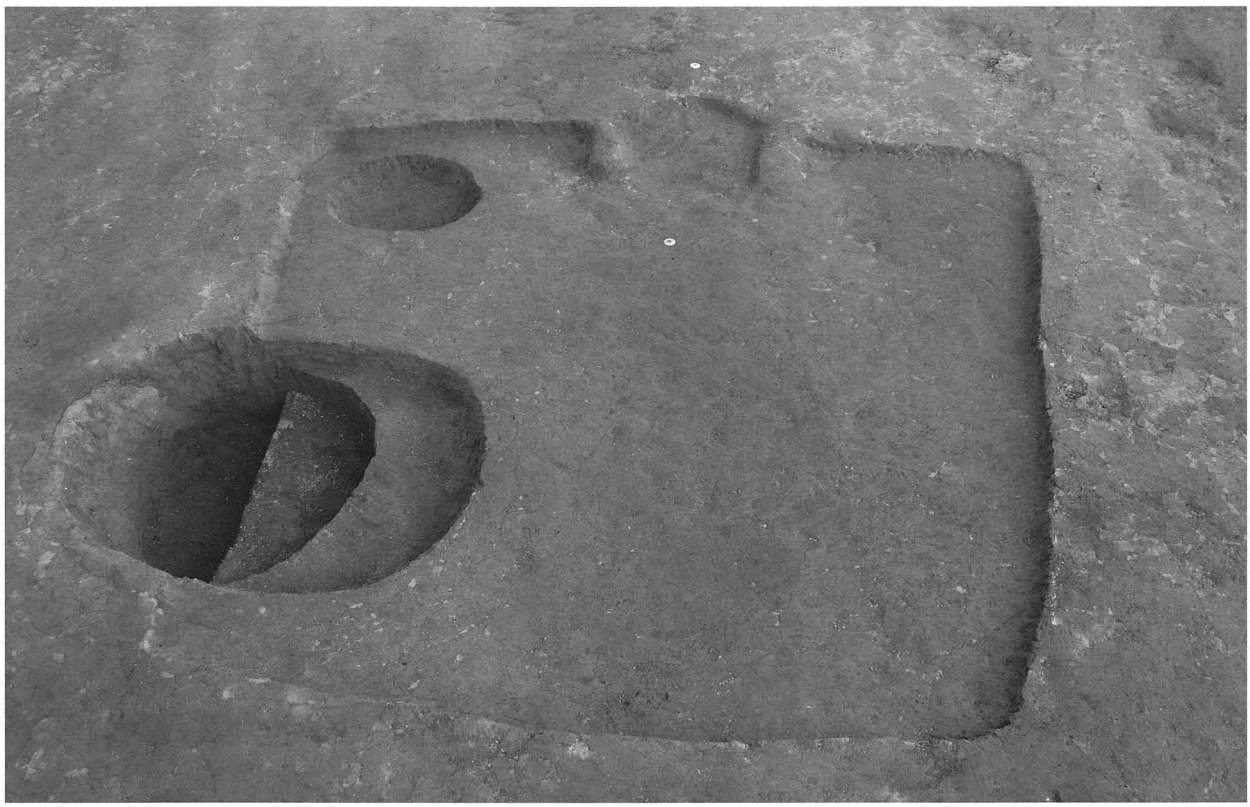
1号住居跡セクション　東から



1号住居跡遺物出土状況　南から

1号住居跡カマドセクション　東から

1号住居跡調査状況　東から



２号住居跡全景　西から

２号住居跡セクション　南から

２号住居跡カマドセクション　南から

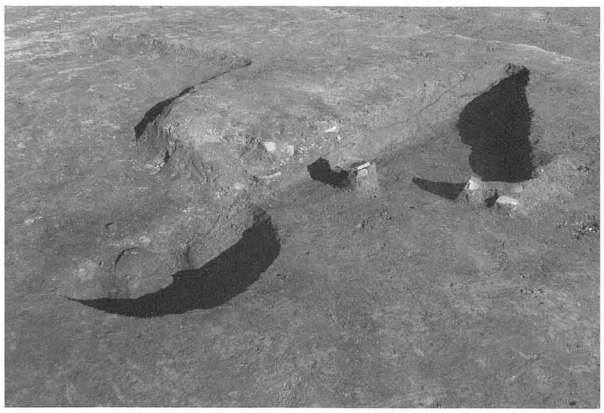
２号住居跡カマド遺物出土状況　南から

２号住居跡調査状況　南から

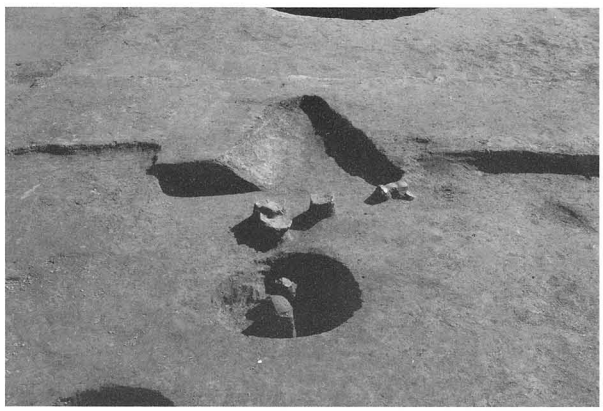
３号住居跡全景　西から

３号住居跡セクション　西から

３号住居跡遺物出土状況　西から



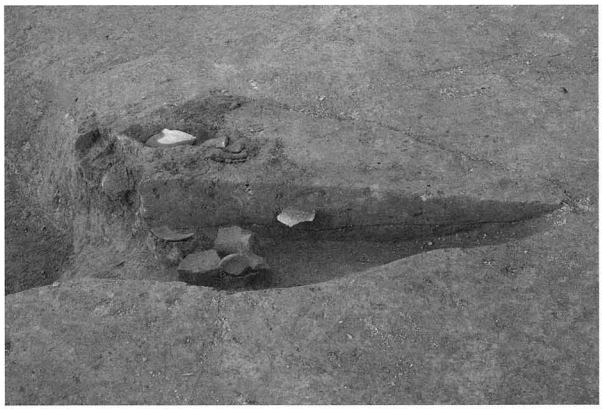
３号住居跡カマドセクション　西から



３号住居跡カマド遺物出土状況　西から

４号住居跡全景　西から

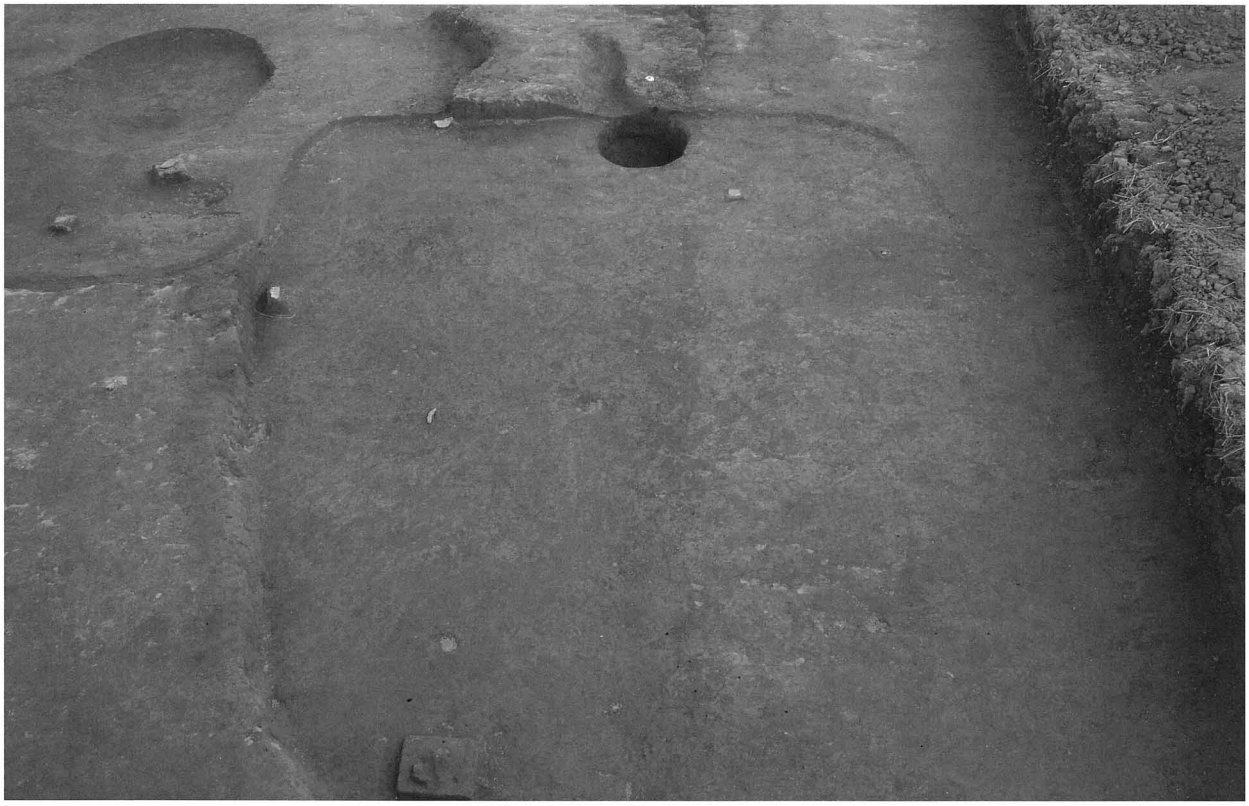
４号住居跡セクション　東から



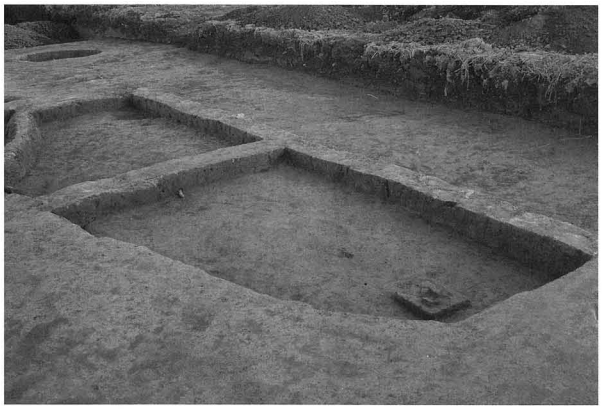
４号住居跡カマドセクション　南から

４号住居跡カマド遺物出土状況　西から

４号住居跡調査状況　西から

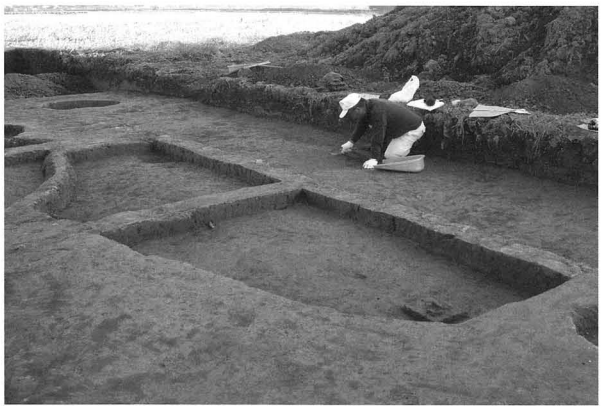


５号住居跡全景　西から



５号住居跡セクション　北から

５号住居跡カマド全景　西から

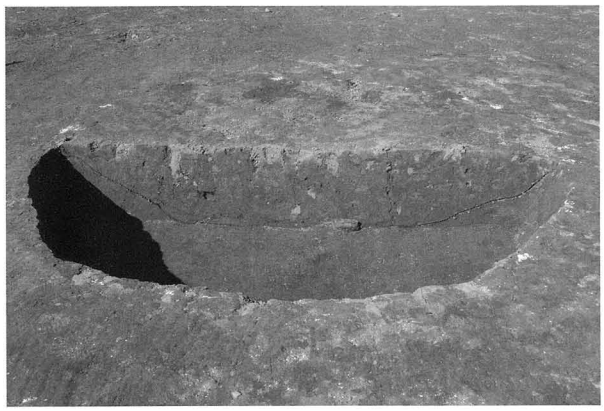


５号住居跡調査状況　南から

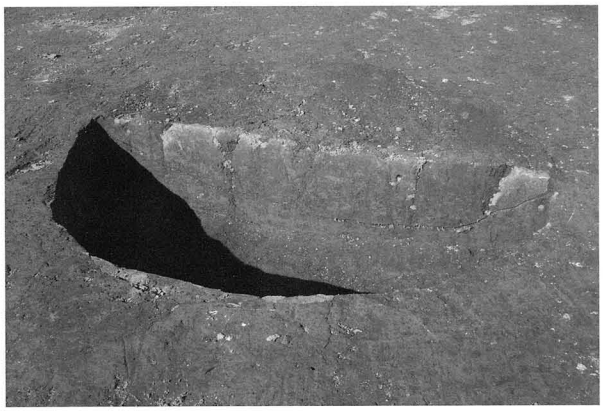
５号住居跡調査状況　北から

性格不明遺構セクション　南から

性格不明遺構全景　西から



5号土坑セクション　東から

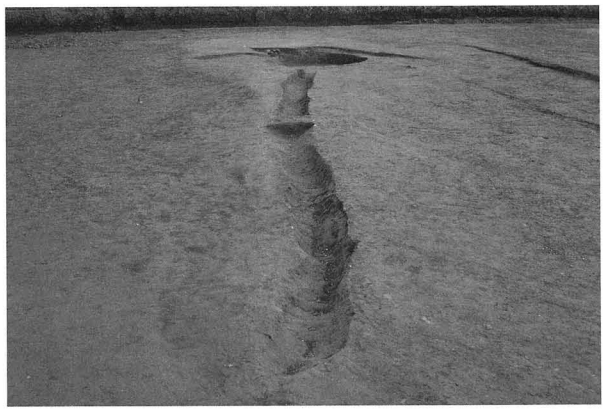


15号土坑セクション　東から

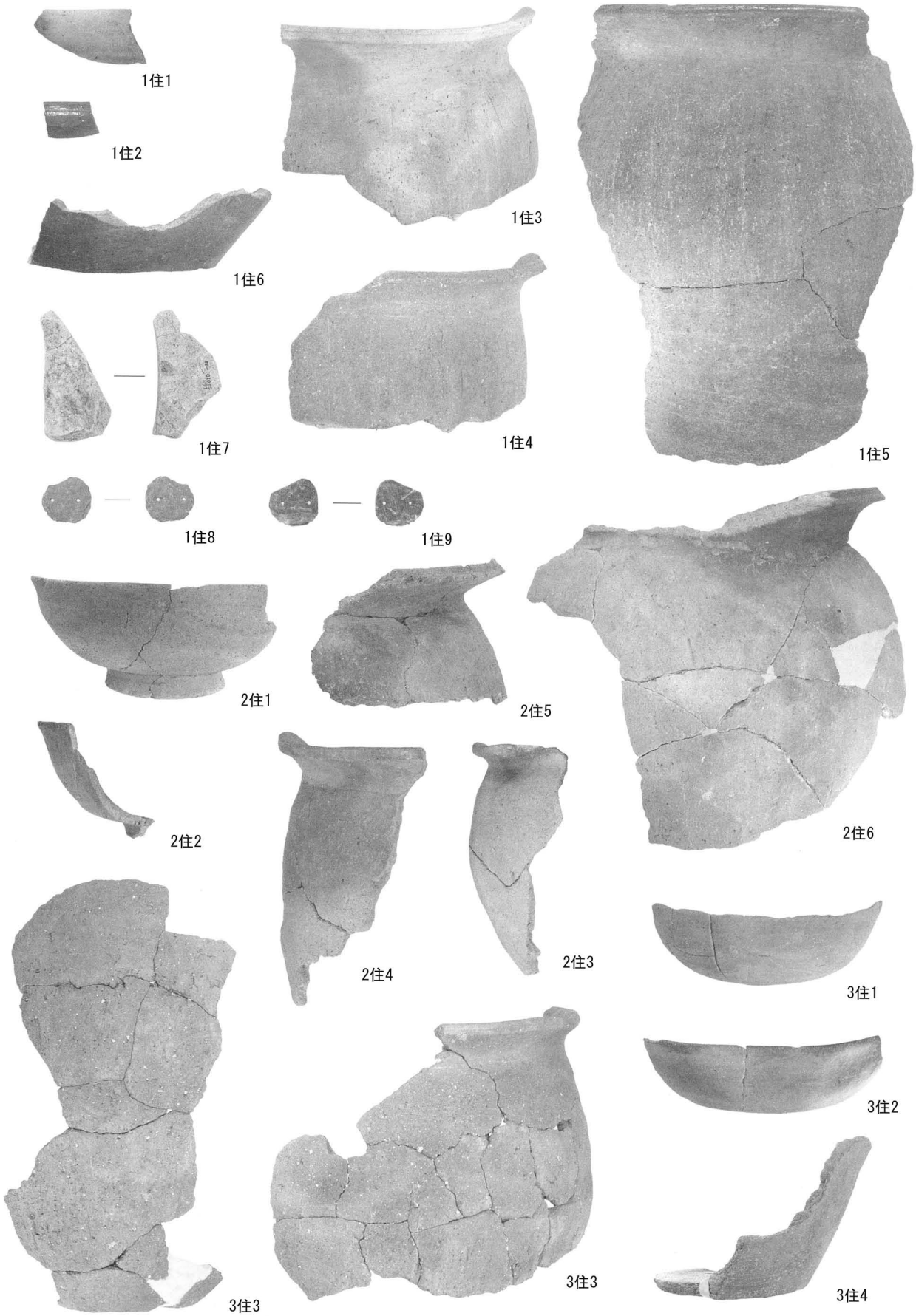
7・14・21・22・29・30号土坑　北から

土坑遠景(1)　南から

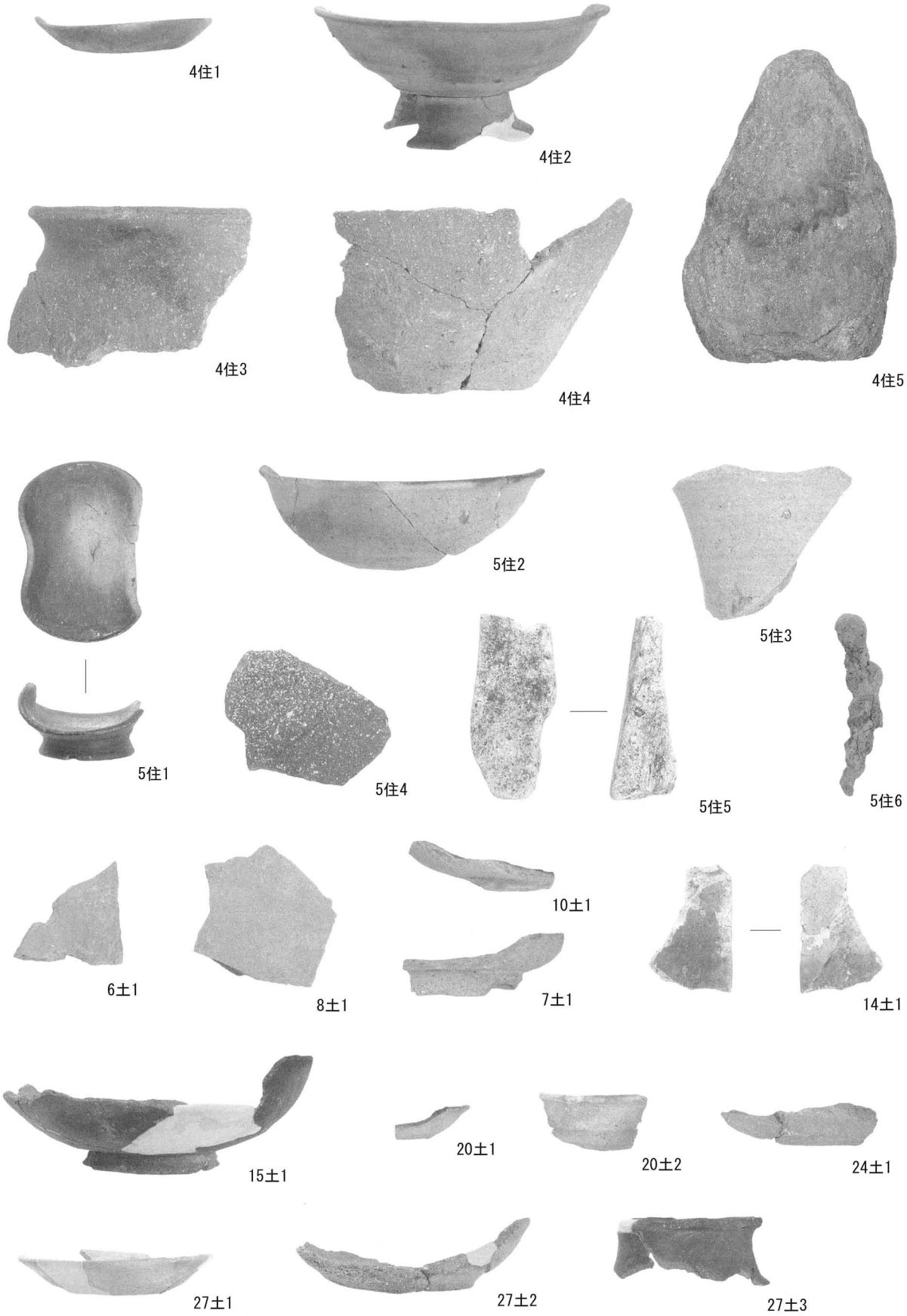
土坑遠景(2)　北から



1号溝　西から


1住1
1住2
1住3
1住5
1住6
1住4
1住7
1住8
1住9
2住1
2住5
2住6
2住2
2住4
2住3
3住1
3住2
3住3
3住3
3住4

１～３号住居跡出土遺物



4・5号住居跡、6～8・10・14・15・20・24・27号土坑出土遺物

性格不明遺構 -1

性格不明遺構 -2

外1

外2

外3

外4

外5

外6

外7

外8

外9

外10

外11

性格不明遺構、遺構外出土遺物

八千代町埋蔵文化財調査報告書 12
「小次郎内遺跡発掘調査報告書」

平成 19 年 9 月 28 日発行
編集　八千代町教育委員会
　　株式会社 地域文化財コンサルタント
発行　八千代町
印刷　社会福祉法人 東京コロニー　コロニー印刷